季寄
註解
改正月令博物筌
六月部
三

特1
2961

ガラス使用

六月部目録

△印あるハ俳諧の季と持物

○暑気生の法○颶雨の考○米の豊凶○蚊薬の方其外人家重宝の事を部々まあゆ入目録にあらハさず

（六月）

卦　月建　調子　陰陽生　異名　六一丁

△小暑節　六二丁

△大暑中　六二丁

日令

此部ハ六月日の定りある事又日の定らざる事をあらハす

△氷室△氷餅　六三丁

△嘉祥の御祝儀　六三丁

△献醴酒　六三丁

△一夜酒　六三丁

△勝負祭　六四丁

△富士詣　六四丁

△六月會　六四丁

△天貺節　六四丁

製索神麺　六四丁

水附　六四丁

△祇園會△河原涼　六五丁

△山鉾△鉾稚児　六五丁

△舟鉾△笠鉾△岩戸山△占出山△孟宗山

△郭巨山△蟷螂山△鶏鉾山△白楽天山

△太子山△木賊刈山△芦刈山△山伏山

△花盗人山△天神山△鶏鉾

特1
2961

ガラス使用

六月目録

△御躰御卜　六ノ五丁
△神今食　六ノ五丁
十四日
△祇園會　六ノ六丁
△津嶋祭　六ノ七丁
△熱田祭　六ノ七丁
△江戸山王祭　六ノ七丁
十六日
△嘉祥祝　△嘉定喰　△かつう　△嘉定銭　六ノ七丁
○袖直　○袖留　六ノ七丁
△志渡寺参　六ノ八丁
十七日
△相国寺懺法　六ノ八丁
△内宮御祭礼　六ノ八丁
十九日
△賀茂御手洗祭　六ノ八丁
△鞍馬竹切　六ノ八丁
△稲荷祭　六ノ八丁
△愛宕千日詣　六ノ九丁
△天橋立祭　六ノ九丁
△氷無月能　六ノ九丁
大祓　△名越祓　△荒和祓　△夏越　△夏祓　△輪越
△水無月祓　△そくへ草　△あさの葉流　△菅貫
△川社　六ノ十一丁
△小蝿よす神　六ノ十一丁
△上賀茂氷無月能　六ノ十二丁
△唐崎千日詣　六ノ十二丁

月令

此部より六月一ヶ月日の
定まらざる事をあつむ

△土用干　△虫干　△虫拂　六ノ十三丁
△雷鳴の陣　六ノ十三丁
△夏節　六ノ十三丁
△浚井　△井戸替　六ノ十三丁

十一日
△月次祭　六ノ五丁
十二日
△解斎御粥　六ノ六丁
△竹生嶋祭　六ノ七丁
△芦御祓　六ノ七丁
十五日
△祇園臨時祭　六ノ七丁
△富士雪解　六ノ七丁
△外宮御祭礼　六ノ八丁
△博多祭　六ノ八丁
△御夫夏神楽　六ノ八丁
△厳嶋祭　六ノ八丁
△納涼　△座頭涼　六ノ八丁
廿一日
△上難波御祓　六ノ八丁
廿二日
△座摩御祓　六ノ八丁
廿五日
△天満天神浪祓　六ノ九丁
晦日
△節折　六ノ九丁
△鎮花祭　六ノ十丁
△道饗祭　六ノ十丁
△形代　△撫物　六ノ十二丁
△茅の輪　六ノ十二丁
△住吉御祓　六ノ十二丁
△施米　六ノ十三丁
△香薷散　六ノ十三丁
△霍乱　六ノ十三丁
△三伏　六ノ十三丁

○九夏三伏　六ノ十三丁
△水掛合　六ノ十三丁
△蕃枇　六ノ十三丁
△鶯鴨涼し　六ノ十四丁
△汗疹　六ノ十四丁
△簟　六ノ十四丁
△清水　△清水の蔭　△清水むすぶ　△清水せく　△清水くむ　六ノ十五丁
△雲峯　六ノ十六丁
○萬鬼行　六ノ十三丁
△竹婦人　△竹奴　△[illegible]　△抱籠　六ノ十三丁
○漆[illegible]　六ノ十三丁
△船遊　六ノ十四丁
△白氣　△撒香　六ノ十四丁
△泉　△泉殿　△釣殿　六ノ十四丁

時令

此部には六月一ヶ月の時候さかりの事どもをのす

○土用　六ノ十六丁
△露涼し　六ノ廿丁
△風薫　△南薫　六ノ廿丁
△暑　△溽暑　△酷暑　△炎天　六ノ廿一丁
訪暑状　六ノ廿二丁
△涼し　△清風　六ノ廿三丁
△晩夏　△夜涼み　△夜更る　△夜寒て　△夜の秋　△夜こそ涼し　△夜を隔　六ノ廿六丁
△夏の涼　△夏よろ清
△夕立　△白雨　六ノ十七丁
△夏露　六ノ廿丁
△青嵐　△[illegible]　六ノ廿丁
△日盛　六ノ廿一丁
同報答　六ノ廿二丁
納涼　六ノ廿四丁
△秋近　△秋を待　△秋を隣　△[illegible]秋　六ノ廿六丁

草木

此部には六月一ヶ月のくさ木の類をあつむ

△百日紅　六ノ廿六丁
△麻　△さらし麻　△あさ刈　△麻引の糸　六ノ廿六丁
△綿の花　六ノ廿七丁
△烏扇　△ひあふぎ　六ノ廿七丁
△釣鐘草　六ノ廿八丁
○馬鞭草　六ノ廿八丁
△萱春罌　六ノ廿八丁
△昼白　六ノ廿八丁
△瓢ひく　六ノ廿八丁
山慈姑　六ノ卅丁
△蕳麻刈　六ノ廿六丁
△苧麻　六ノ廿六丁
竹皮散　△竹皮脱　六ノ廿七丁
△玉簪花　六ノ廿八丁
△麒麟草　六ノ廿八丁
○猫児眼睛草　六ノ廿八丁
△虎尾　六ノ廿八丁
△夕白　△瓢の花　六ノ廿八丁
商陸花　六ノ卅丁
△鷺艸　六ノ卅丁

ガラス使用

△蒲穂　六ノ卅丁
△灩摩　六ノ卅丁
△緑豆　六ノ卅丁
芡実　六ノ卅丁
△赤草　六ノ卅丁
△慈姑　六ノ卅丁
△河骨　六ノ卅丁
△菱花　六ノ卅丁
△蓮花　△白蓮　△紅蓮　△水ふよう　△池之帅　△[illegible]　六ノ卅一丁
△荷葉　六ノ卅二丁
△藺の花　六ノ卅四丁
藺刈　六ノ卅四丁
席草　六ノ卅四丁
△菅刈　六ノ卅四丁
△藍　△あい刈　六ノ卅四丁
樹茂　六ノ卅四丁
△青田　六ノ卅五丁
△田草取　六ノ卅五丁
△芦茂　六ノ卅五丁
△林檎実　六ノ卅五丁
△早桃　六ノ卅五丁
△青鬼燈　六ノ卅五丁
△青蕃椒　六ノ卅五丁
△蘘荷子　六ノ卅五丁
△凌霄花　六ノ卅五丁
△風蘭　六ノ卅五丁
汐見坂　六ノ卅七丁

△神馬藻　六ノ卅七丁
△瓜　六ノ卅七丁
△豇豆　△小角豆　△青さゝげ　△十八さゝげ　六ノ卅七丁
△甜瓜　六ノ卅七丁
△瓜皮　六ノ卅七丁
△白梵天　△梵天瓜　六ノ卅七丁
△下瓜　六ノ卅八丁
△熟瓜　六ノ卅八丁
△菜瓜　六ノ卅八丁
△南瓜　六ノ卅八丁
△南京瓜　六ノ卅八丁
△阿古陀瓜　六ノ卅八丁
△緒花　△絲をとる中　六ノ卅九丁
△紫蘇　六ノ卅九丁
△蒜根　六ノ卅九丁
葫荽　六ノ卅九丁
△藕実　六ノ卅九丁
△夏切茶　六ノ卅九丁

種植

播らん ○鷹爪 水をそゝく ○その扱む　六ノ卅九丁

生類

此部より六月一ヶ月のいき物どもあつめしるす

△燈蛾　六ノ四十丁
△蟬の法声　六ノ四十丁
△蟬脱　六ノ四十丁
△空蟬　六ノ四十丁

△夏虫 六ノ四十丁
△残蝿 六ノ四十丁
△金亀子 六ノ四十丁
△鳥毛虫 六ノ四十丁
△蠓 六ノ四十丁
△螳螂 六ノ四十丁
△練雲雀 六ノ四十一丁
△遨雲雀 六ノ四十一丁
△鶴鷹 六ノ四十一丁
△鯖釣 六ノ四十一丁
△川狩 △さで △四つ手網 △投網 △もち網 六ノ四十一丁
△海月丸 六ノ四十二丁

必用

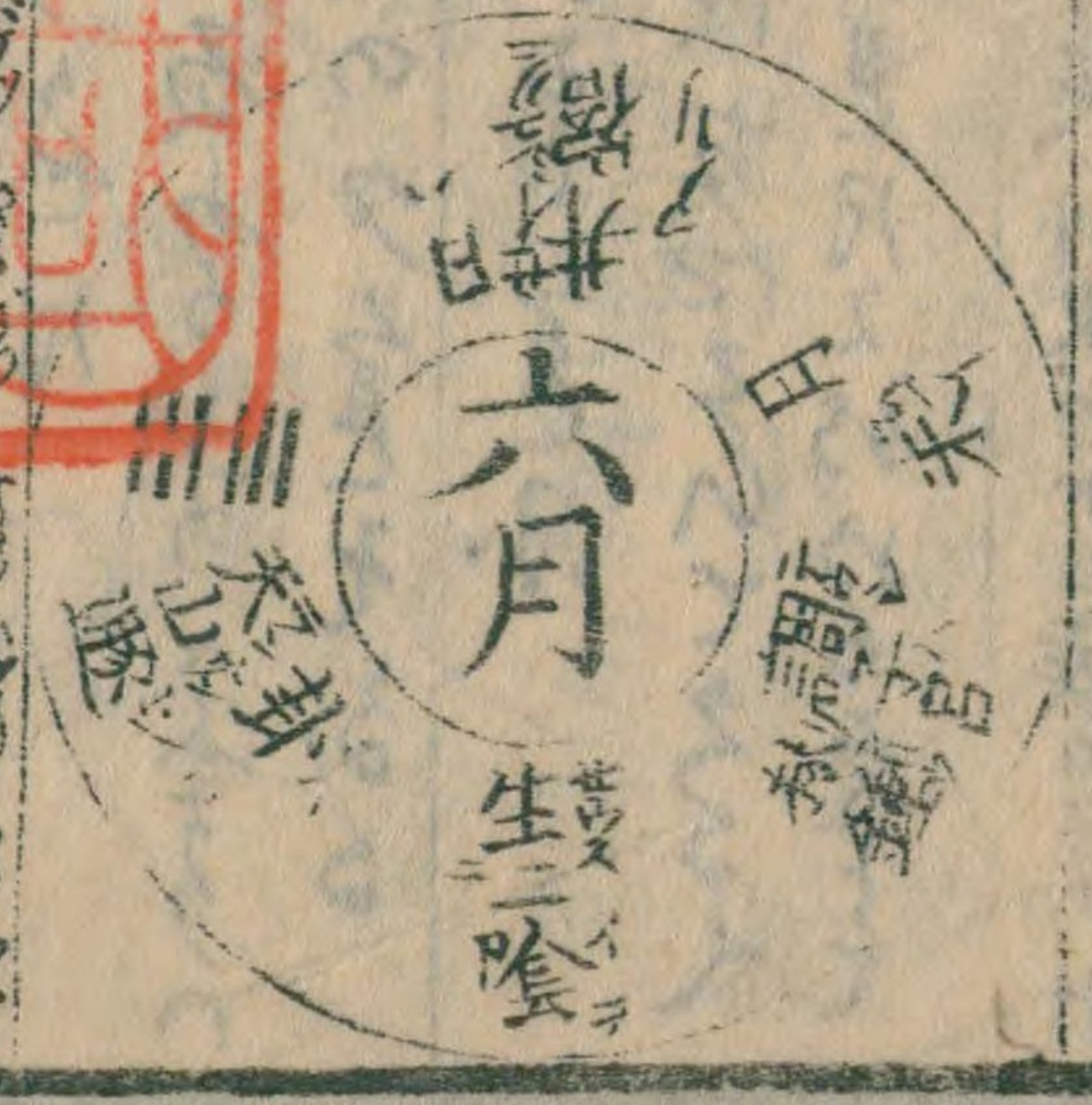
此部ハ風雨占日取のしるし料理献立其外重法の事也

饗飯 △水飯 △洗飯 六ノ四十五丁
△灑鱠 △せだし鱠 六ノ四十五丁
鶏飯 △氣飯 △引飯 六ノ四十五丁
△冷索麺 △冷麪 六ノ四十六丁
瓊脂菜 六ノ四十五丁
△醤油造 六ノ四十六丁
△納豆仕込 六ノ四十六丁
△はしほ造 六ノ四十六丁
△奈良漬製 六ノ四十六丁
△麻地酒 六ノ四十六丁
△水の粉 △葛粉水 △[illegible]水 △砂糖水 六ノ四十六丁

六月之部

△印あるハ俳諧の季を持ものゝ

陰ハ上天と地下にありて此時陽氣盛なり其時令ニ随ひて仁慈を行ふべし



異名

△且月 △朔月 △陽氷 ○庚伏 ○六陽 △季夏 △晩夏 ○徂夏 夏未の △林鐘 律 △せみの羽月 △風待月 △水無月 △鳴神月 △常夏月

異名註

△且月ハ尓雅 六月を且と云とあり △朔月 礼記ニ出○陽氷是詳ならす疑らくハ陽冰の誤ならん○庚伏六月ハ火壯ニ金火を畏る庚日を伏るをいふ依て名とす○六陽ハ旱と又○季夏ハすゑの夏也○晩夏ハおそき夏といふ也○徂夏ハゆく夏也

△林鐘ハ林ハ衆(おほき)也鐘ハ聚也あつまる事也物のさかんなるといふ

○鐘て鐘としてくやしのかひみく督と誤(あやまり)たるなり△風待(かぜまち)月風の稀(まれ)なる月なれハいふ△水無(みなづき)月水なしと云略也△鳴神(なるかみ)月雷多故名(なづく)

莫傳　涼暮(すゞくれ)月

風ふけハ浪よ結ぶるいつくなる
さゝくれ月のころまてそなれ

藏玉　とこなつ月（とこ夏の花さくころえ）

ちりそめし妹かなさせん常夏の
月結ひる花のさかりは

同　まつかせ月

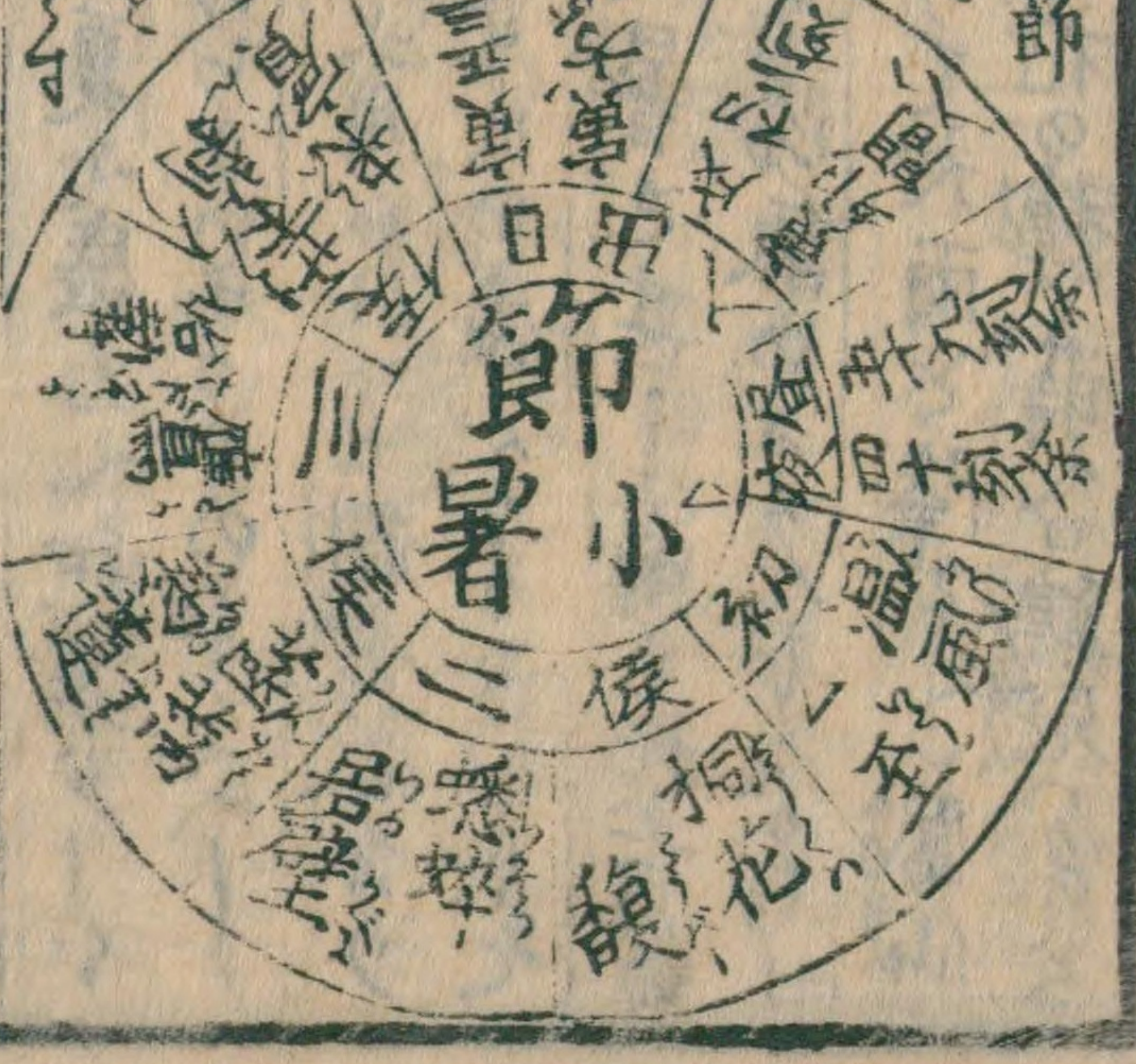
吹たえぬ夏なる山のふもとなれ
松風月の夕まそする

秘藏　いさな月

わくらきほしてひてるく
いさよひ月をねぬるとて

節　七十二候○卅木七十二候○日の出入○昼夜長短を記し註を加ふ

六月の節小暑と云ハ極熱大暑の節也大小を分て初を小暑と云ひ後を大暑とす

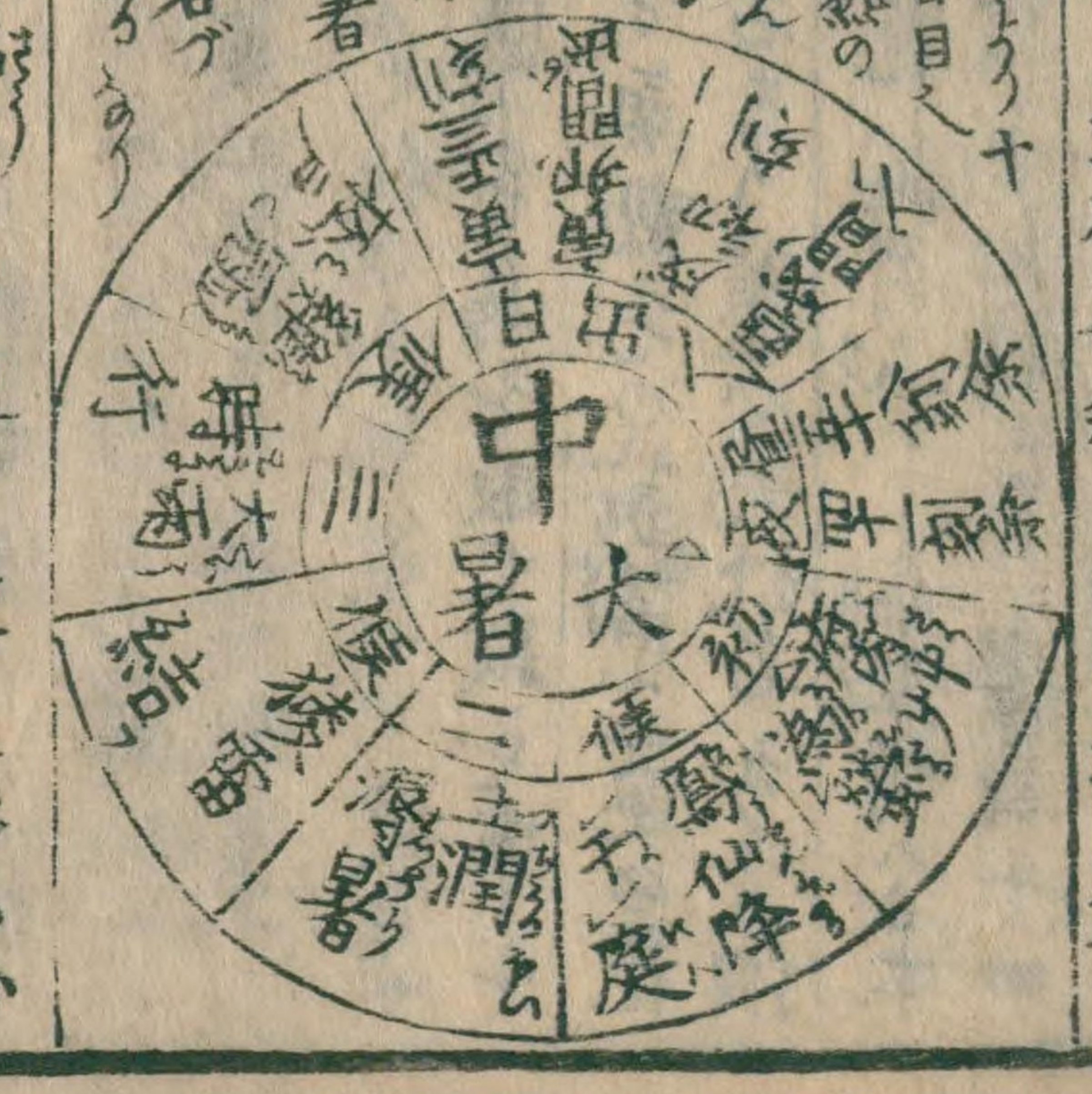


△温風(うんふう)ハ風もあつくふ吹也○蟋蟀(きり〴〵す)ハもく〳〵秋の氣近くかんじ（ 土中）より生しあれともまた得動(はたらか)す○鷹始摯(たかはじめてしす)ハ鳥を取る事を学(まなび)てとりく秋の金氣近つく也自然に感じて鳥を取て殺す事をなす氣動也○菡萏(かんたん)ハ蓮の花の名なり蓮ハ実の名なり○桐花ハ此月香し○茉莉(まつり)ハ日本にはまれなる花なり慶長十四年島津家久佛桑モリシ花を献せし事あり

中△大暑ハ七十二候。艸木七十二候

○晝夜長短。日の出入等左ニ記ス

節より十六日目之極熱のさかんなる時なれバ大暑と名づくるなり



腐艸(ふさう)ハくちたる草之暑にむされて螢を生ずるをいふ本朝にハ中夏に盛んに和漢少しく時候のちがひあるなるべし

○此時土用なれバ土潤(うるほ)ひ蒸(むし)あつきうへに火の盛んなるにむしそふまて暑(あつ)さ甚し雨も此土用の濕(しつ)氣を陽氣のさかんなるがむしのぼりて大雨と降とぞ。○鳳仙(ほうせん)ハ鳳仙花の種(たね)を蒔(まく)べし。○鷄冠(けいとう)ハつくべし

日令

此部ハ六月日の定まる事文の定りなると祀を○祭の類ニ係るもの大抵祭と同じゆゑ

朔日　天氣　風雨あれハ米價貴(ねだかう)し　○西南の風ハ虫を生る

○日蝕(しよく)あれバ旱(ひでり)之

△氷室(ひむろ)　四月朔日より九月盡まで氷室の氷ハ獻(けん)ずるものなれども今日を專(もつぱ)らとす此時御膳に氷を奉るそひのはじまりハ仁徳天皇六十二年額田(ぬかた)の王子狩(かり)に出たまひし氷室を見て土人に問(とひ)たまふ土を一丈余堀(ほり)て草を其上に蓋(ふた)ぎ氷をおさむれバ極暑にもきえずと申す王子その氷を取て仁徳帝に奉らせたまふ是その始にて民間(みんかん)よりも是に准(じゆん)じて

△氷餅を祝ふ（哥）夫木　俊成

みな月のてる日ふたえぬ氷室の流あるとも

岩のけしきハ行もすゞしき

（詞）△氷室の雪△氷室の御調(みつぎ)。氷室の

梅。氷の面れひとつ見す。枝の下風。皇の髪の乱しこ代の手と見え。山中風家

士垣。末凍り。花の法なれ。岩。

涼し猪口事。いかし亀。夏衣目。土さけてなれ日。氷売し（来の不松が添く）

㊥ 祢やりの友や附そう物多 宗祇

㊇ 氷室の雪の素白（日蔭草） 其角

〈夏事のまれ人とおし 解 十六

氷室故事 **凌人職** 周礼ニ出 氷室ヲ主ル官ナリ 夏コレヲ群臣ニ賜フトアリ 又左傳ニモ見ヘタリ 日在北陸而藏氷西陸朝覿而出之トアリ

△**忌火の御飯**で供す 忌火とハ不浄の火を打ちるを云 内膳司より月次の御神事の食を奉るを大床子の御座まで供し奉る

△**獻醴酒** みなつきごもりより七月晦日迄 毎日これを奉る

とあり 今のあまざけの事なり

㊇ 年中行司 前大納言

寶手代も年へとせえん六月の ちよのこゝろも君がまにく

△**一夜酒** 今日造れバ明日ハ供するゆへ名付るとぞ

㊇ 呑め遊べ山よハ飯のひとよ酒 家定

京 松ヶ崎 氷室祭

祇園會鉾のちご祇園社參 △**愛染祭** 八坂

明日勝負院 諸 **駿河** 富士詣 今日 廿日まで登山するなり

㊇ 除雪のつもりの夜ふし富士講 諸事

〈晴ていまさら四雲ハ富士日記 其角

安藝 嚴島市 今日より七月八日までの御定なり 十日ころより芝居諸商人多く来り甚だにぎわし

三日

天氣 いりしの雨あれば今月中ふりほぐく俗に梅雨

返りよく **京** 高雄虫干 九日まで **江戸** 本所法恩

寺谷中宗延寺法花千部執行

四日　△六月會　傳教大師忌日寺々行る○坂枕御年高と云こと有　江戸　箕輪

天王祭

五日　京　祇園會山鉾ゆるり初　江戸　牛頭天王祭（大傳馬町二丁目東がおゝび所へ渡出）

六日　天貺節　宋神帝詔して今日を天貺の節とす○不成就日

天氣　晴るハ秋収多し　雨ふるハ秋水多し　風雨あるハ米價貴し

製神麴（二素か五月）　今日も製するによろし　本艸に委し

水貯　此日水を取浄き甕に收め貯る事一年を越してもくさらず此水にて醋醤油又ハ漬物などされバ一年過ても壊れずとぞ

京　祇園手水の井を開く　烏丸三条坊門の南にある井也

今日より十四日まで蓋をひらきしめ引松立ると往来の人々水むすび行ふあり

七日　△祇園會三社神輿今日卯の下刻本社より祇園町を四条寺町御旅所に十四日まで御出あり

○七日より十八日まで四条河原ハ夕すゞみあり是を△河原をそゝといふ

㊖　祇園會や何山彼山人の山　保友

狂　引て来ると見れハ退行山鉾よそりや祇園の會者定離之　行風

△山鉾　卯下刻四条高倉より寺町へ出松原迄下りそれより東洞院へ長刀鉾　函谷鉾　月鉾行て自分の町々へかへる　△菊水鉾　△放下鉾　△舟鉾　△笠鉾　△岩戸山　△占出山　△孟宗山　△郭巨山　△琴破山　△蟷螂山　△白楽天山　△太子山　△木賊刈山　△芦刈山　△花盗人山　△山伏山　△天神山　△雞鉾

ガラス使用

江戸。神田天王祭。南てんま町御出。品川天王祭。両社の御輿中の橋のうへにて行合南北へわかるゝ故に行合の橋と云

八日

江戸。浅草天王祭。神田天王御帰り

九日

京　北野天満宮九度参り（東向の観音堂よ参詣あり）

江戸　鳥越明神祭（隔年子寅辰午申戌の年）○千住橋の上にて綱を引合年の豊凶をうらなふ事（今はなしと）

十日

△御躰之御占　神祇官の官人主上の玉躰に御つゝしみあらん事を占ひ奏さるよし公事根源に見えたり

京　吉田西天王祭○比叡山恵心院（源信忌）

江戸　神田牛頭天王神輿小船町御旅出あり（今日出十二日ニ）

十一日

△月次の祭　十二月にもあり　諸神へ御幣を奉りしんてうして伊勢太神宮を勧請

△神今食　申させ給ひ天子みづから神膳を供せさせ給ふとなりや（年中行事　入道大納言）ふるき事も今をはるかにすゝしまさぬ神もあらたのとがめや知らん

京　松尾神事能

十二日

天氣　今日烈風を吉とすと群芳譜に出す

△解齋之御粥　日の御座の大床にて甚盤一脚を立御粥および土器に和布の御汁物とそへてまいらす三口まゐされて御器をさげらるとなり

京　祇園會山鉾引初

堺　大寺三村明神祭

十四日

不成就日

京　松尾神事能△祇園會（卯下刻山鉾三条東洞院より寺町へ出四条へ下りそれより西へ行自分の町々へ帰る。）橋弁慶

ガラス使用

山〇八幡山〇悪ふさ人山（宇治の合戦浄明秀一来とびこえのり）（以かりうるかへあしふきよらへと 以心そ甘ろ山の名あり）役行者山

鈴鹿山〇鯉山〇観音山〇鷹山〇黒主山〇

船鉾〇未刻神輿三座御旅所四

条寺町より西へ渡りあるへ少将井の

神輿三座ハ四条東洞院より上り

二条を西へ御城の前と大宮へ出三

条大路を御神供社へ至りなるよ

（三条黒門通の角あり）二座の神輿ハ四条を

まぐふ烏丸へ出されより松原へ

下り西大宮迄行北へ上り三条御

神供所より至り三社の神輿一所ふ

會し（ぬ人）此所ふて神供を奉る（吟）

（奉り一手團子十吾に 諸人まあまへのてうむ）それより行列を

改め三条を東へ寺町を四条本社へ

還御（俳）山くやまて出るぎ出ん

の（ゑ）に琴なぐあんまやせんぐ

まちくり乃山　曽呂利

江戸

亀井戸香取社祭

大坂

難波村午頭天王祭

近江

△竹生嶋祭（今明日）〇山王祭渡り初

尾張

△津島祭〇入（明日こ）△芦御輿△熱田祭

（五十日）

京

祇園臨時祭　勅使立あづまあそびを

奉らるゝと公事根源ふありと

いへれとも今ハなくて止〇浄花

院垂拂〇吉田小角豆祭

江戸

△溜山王祭礼（隔年丑卯巳未）（酉支の年ハ祭の練りもの笠ふこ 芽出る所百三十余丁あり）

〇赤坂氷川大明神祭　隔年

〇浅艸観音奉今日びんささらの神事

〇芝浦小鰡網で下を今日迄ハ禁制く

大坂

三津八幡神事（今明）〇天王寺

講堂蓮華會　午の刻

富士雪消　今日まで富士の雪消るといふ

㊇ 万葉ふ

妹のまふうつむ言いふる月の

もちゐあめきいその衣つりたり

連　とえて詠る一具や夏のとこの雪　省栢

十六日

△**嘉祥祝**（△嘉定喰△嘉定銭△かつう）○仁明帝の時豊後国より白亀を奉る吉兆とし て年号を嘉祥と改む一説に同帝の時御代の栄を賀茂に祈らせらる今日吉日をえらみて御祓あり年号嘉定と改るとあれども実記見えず一説に室町家の納涼の遊に楊弓を射て負たるもの嘉定銭十六文を出す嘉定は宋の年号十七年まで毎年銭を鋳さし年毎にしるしあり此元年よりの銭十六文を用ひしとぞ

袖直（袖留ともいふ）男女とも今日袖をとめる振袖を着し座鋪へ出て父母にまみへ盃をいたゞき乳母などにも盃事あり其後留袖を衣て月の出るを見るもくしはよつて月見の祝儀とも又故実なり御作法は猶故実あり

伊勢　△外宮の御祭礼あり

讃岐　△志渡寺祭（十五日より十七日迄）

筑前　△[illegible]多祭今明

十七日

京　北野東向観音開帳十八日迄　△相国寺閣懺法○等持院虫干○かつら川夜宮祭

大坂　御霊　△夏神楽

伊勢　△内宮御祭礼

安芸　△厳島祭

十八日

京　祇園御輿洗　今日みこしをあらひ奉る○山崎宝寺観音開帳○桂川神事能并大二条山門のちやく執行す

江戸　四谷天王祭（隔年丑卯巳未酉亥の年あり）

十九日

観音参　日成道の日

京　△賀茂御手洗祭（十九日より廿日まで）△糺涼○十九日より廿日まで　△座頭

の納涼○清聚庵といふ寺へまゐる

(俳) 月も見え夜風ハ老松の涼しさ　林戸

(狂) 庵氏氣涼しくて夏れハ酒ありて
てらしとらけそ平氣澄まり　宗増

十九日 **天氣** 今日雲たなびかれバ豊年のしるし

京△鞍馬竹切　當所の本堂と西觀堂と両所に集り西方ハ青竹を一丈斗に切て立置本堂の近江方觀音堂ハ丹波方として一山の院主大法事を行ひ終りて双方弁慶にて定声と合て彼大竹を三ツ伐て七曲りの切石のりへ走りゆく早き方を勝とす夜に入て奇怪の事とも多くありとぞ

廿一日 **大坂**△上難波祭○はなくし町にあり仁徳天皇の御祭礼也俗に呼難波と云社内の宮なり

廿二日 不成就日

京 栂の尾虫干（廿七日まで）○水無瀬後鳥羽院御影御開帳

大坂△座摩宮御祓

座摩ハ祭る神五座也神輿御渡りの道筋ハ朝辰の下刻よりくだりと本町へ出堺すじ高麗橋へとをり夫より東ハ大津町のおたび所へ入なり

同しく申の下こく同しき所を久太郎町へ西へまがりて還御あり

廿三日 **京** 松尾神事能

廿四日 **京**△愛宕千日詣（廿三日の夜よりまゐる）（夜明にて諸人あたご山へのぼりまいるなり）○東寺後宇多院御忌并弘法大師像開帳（今明日）○松尾神事能○要法寺虫拂

廿五日 **江戸** 芝愛宕宮祭

京 黒谷虫干○本能寺虫干○誓願寺虫干○妙顕寺虫干

江戸 亀戸天満宮神輿舟にて竪川より一の橋北川口まで渡御此所まで名越の御祓あり

大坂△天満天神宮御祓朝巳刻

ガラス使用

神輿二座渡らせらる天神橋通を大川すじの濱側ついで難波橋まで是より舟ぬ乗じ大川をあび島あそびの宮へ入せ夜に入て還御

丹後 △あまの江橋立まうり ○切戸文殊會

廿六日 **越前** 日永嶽参（今日）（廿八日まで参りあり／常は参詣なし）

廿七日 **京** （本国寺虫干／大徳寺虫干）

廿八日 **京嶋原**

住吉祭○妙心寺方丈虫干○加茂水無月祓（今日より晦日まで／つゞきにあり）

廿九日 **大坂** 玉造稲荷夏神楽○（同平野町神明同断）

晦日 不成就日

天氣 風雨あるときハ米賤しかれハ南風ハ蟲を主る

節折 竹をもって主上の御たけの寸法をとりて其をとふ折あてらるゝよりとらへなりよをりの命婦官主に仰せて御祓をつとめらる

△**鎮火祭** 卜部氏の人火を打て宮城の四方の隅にて祭事火災をふせぐが為也

△**道饗祭** 是も都の四方にて鬼魅の他方より来るを入まじてんと是の路上に供物をそなへ祭る也

△**大祓** 昔ハ百官ことごとく朱雀門に出て祓をなす麻の葉を切て祓するを今ハ麻を祓草といふ也○此水無月祓のこと諺多し春より夏にうつるハ春の木夏の火にて木生火也其外も皆相生なれども夏より秋にうつるハ夏火秋金火尅金と尅するを祓ふとなり然れども土用四季にありて夏の土用を以專とす是中央土用の位なるを以てなりなかにもそれ

ガラス使用

土生金と相生く○祓ぞする事九夏三伏（ふく）のあつさに邪鬼（じやき）のごとくあれバ是をはらひきよめて行年の半（なかば）を守るべしと此月祓をする所なり△なごしの祓も夏越（なごし）の略言なり○つぎの詞の処に委し

㊂哥　年中行事哥合
夏ひきの麻のをさゝうつそへて
よくの流さの祓をうらしを

續古今　夏祓　家隆
夏くれて流るゝ麻のゆふみえ川
瀬のよどにことそさゝ夏つらん

玉葉　名越祓　兼行
風まさる河瀬の波に夏すてゝ
夕くれとうけて神そ涼しき

千載　六月祓　季通
夕くれハ麻の立枝にゆふかけて
夏としる月の御祓をぞする

夫木　夏神楽　公朝
河社あやのしらてもんかゝりつゝの
神なる嫁も涼しそをする

堀川百首　河夏祓　成行
御祓川小夜更わたる麻のその
よる瀬のなみにふかよふ秋の風

同　荒和祓　仲実
八百萬神も浮臣になびくらん
けふまつるねぎのこと葉つれえ

○荒和ハあらぶる神を和らげなごむるを云

㊂詞　禊。秋風。麻の葉。菅原。足丈。河瀬。縄川。浪色。夏る月。里村。国

△御祓川△夏祓△夕祓△夏往来△水無月祓△麻の葉ふ流（あさのはを幣とする也／それをかう川へ流す也）△禊臺（みそぎする）△菅貫（すがぬき）（祓の具也）荒和祓にくゞり代わるを手ぶさ云れて

㊂連　祓さとる水ハ心のちりをとりや　宗祇

㊂誹　夕そよぐ御祓も夏になごりかや　小長

△おもふ事すさくら土を祓ふ夏神楽　其角

覚えと夏かけとまつ御祓かな　涼袋

㊂狂　来る秋と夏ハ色よりさらへ絶えの
麻中ちのぞそひすらんかな　淡路守宗増

△川社（かはやしろ）夏祓に川辺に棚を構へて神をまつるなり

△形代（かたしろ）△撫物（なでもの）○御祓する人形を作
△是ハ人形をもて身のさいを

んと披ひ川　蠅

まをがすべ△小蠅なし神の

ごとく悪邪多きといへ日本記ぁ

いづ是ハ夏の熱邪をいふなり

(参)さた人等あし人形をもて流して

今月ハ名越のそゝんとする

△茅の輪　午頭天王蘇民将

来ニ教へ給ふの道風

疫病はやる時是をかれハ災難を遁るゝ

(俳)振袖と結んで潜る茅輪かな　翁語

京○上加茂氷無月能

○建仁寺泉涌寺布薩戒

江戸○浅草寺花講

△佃島住吉の御祓

大坂△住吉御祓　所々より待り物

擲の挑灯いろ〳〵の作られ

手とはらして渡る午の刻頃よ

りそろ〳〵鷹師社人社僧神

馬等かぎ限りもなく次第の

列を守りてまゐる四社の神輿

と祭奉る社務ハ車にて反橋

の本に立る神輿一社七度

此濱に出し奉って潮とり

とりの〳〵それより堺の宿院の

御旅所へ遷幸あり神人のつと

と奉る夜に入り神輿住吉へ還幸

其節堺より送る者住吉迎る人多く

火をともす夏登のはし是を△火数と云

(俳)夜祓日のゆく方や浅瀬の　嵐雪

(狂)像歳ハ御祓の夏のそゝのして

金を競せよ

又ハ祓は貞節

近江△唐崎千日

参り御祓

月令

此部より六月一ケ月日の定まりたる事を記す

△土用干△虫干△虫拂○書衣等の中の白魚を去る故に虫干とは

(俳)嫁今し姉の初衣土用干し　其角

椿脳に世をゆづりこの蟻るる　全

京　妙心寺虫干○天龍寺虫干

○大徳寺虫干　いづれも定日

ガラス使用

△施米 山寺の僧に米塩など（公より下さる（事）年中行事）これ月のみならず悉て知られけり君うれんぞの秋のものとは

△雷鳴之陣 かみなりの声三度高くなれバ大将以下近衛の次将迄弓箭を帯し御殿孫廂に候して天子を守護し奉ることハ公事根源等に見へたり

△香薷散 暑気の煩専ら用る薬方なり

（俳）暑気いかほどなりともこれにて治を（香薷散名大に称ありて書に貴其薷）

△夏節 小児の頭面に無名の腫物いづるをいふ

△霍乱 ○病の名也 △夏痩

霍乱妙薬 陳皮生姜 水煎用也 ○あしの根よし ○芦の葉をせんじ呑てよし ○たでの実香薷をせんじてのむべし ○又法 かうじを擂りわそふつけてよし

△浚井 曝井とも書く △井戸替の事也 新井の義 あるて夏日井を新にすれバ瘟病をやまずと見へたりむかしハ此月に井水を替しとなり今ハ七月に井をさらへることとなり

△三伏 三庚閑日ともいふ夏至の後第三の庚の日を初伏第四の庚を中伏立秋の後最初の庚を末伏といふ委くハ本篇博物筌にあり

△占候 三伏の内西北の風あれバ極月氷り多し ○三伏をみなかず熱すれバ冬雪おほし ○三伏の内嫁娶をすればあしし ○木を伐バ虫くむとれし

△九夏三伏 九夏ハ夏九十日也三伏の訳ハ已に伝も

萬鬼行（ばんきかう）　後漢の時伏日にハ鬼出るとて盡日（ひめもす）門戸を閉あるひハ湯餅（たうべい）を作りて辟鬼（へきき）と名づくといふ○秦のとく公やしろを建て祭ることゝし虫災（むしのわざはひ）を防せぐとぞ

△**水掛合**（みづかけあひ）　夏戯（なつのたはむれ）にて水辺（すいへん）抔にて水かけ合をするをいふ

△**竹婦人**（ちくふじん）△竹奴（ちくぬ）△脚馬（きやくば）△抱籠（だきかご）を　すべて竹の籠をいふこれ或ハ足をのせ手をのせして涼（すゞ）しからしむるよりいへるなり

㊕抱籠は吹れ見えひくゝ竹婦人　勝英

「抱籠や妾かへてきのふけふ　其角

△**籠枕**（ろうちん）　竹をもつて是をつくる竹細工（さいく）の名地所多く出る

漆取（うるしとり）　うるしの樹ハ中心黄にしてかたし水に漬（ひた）て腐（くさ）らかし刀斧を以樹の皮に切目切つけをしておけハ白汁滴（したゝり）を出し後変（へん）じて黒色なり此汁を集めてこれをもて取るなり近国にてハ大和國吉野には多く此職あり組し籠（かご）にて取る物ハ是湿漆（きうるし）より塗（ぬり）ものに用るハ奥州羽州下野より出るをセシメウルシといふ是上品なり吉野ハ銀朱に合せられ用ゆ越前至て下品なりとしれ日本を上品とし唐土の塗ハおとるなどゝいへれ故（ゆゑ）にもろこしへ渡ること夥（おびたゞ）し

○此実より蠟（らふ）をとるなりまつくしも上品え（ゑぞ白の蠟ハ／これハ低くなり）

△**鵞鴨涼し**（おしがもすゞし）　此外月。露るどれても涼しとまれハ夏の季になるなり

㊕そよくるや夕兵部の下涼み　白成

ガラス使用

△船遊(ふなあそび)　俳　大名の我儘さるや舟あそび　季州

△汗疣(あせも)　熱沸瘡(あせも)ともいふ〇夏身うちにこまかなる物いづるをいふ　あせもの妙薬　きうり其の切口にてすりてよし〇又かをの土だ粉にしてつけてよし〇又天瓜粉(てんくわふん)をはさして妙也

△匂袋(にほひぶくろ)　△掛香(かけかう)　俳　掛香や襟ぬいさしたる妻の衣　青女

狂　匂ひ袋も匂ひ袋のたぐひなるや丁子かしらの中までもれて　久清

△簟(たかむしろ)　竹のむしろ延(のべ)たる暑中是をしきて暑をさるなり〇又藤(とう)むしろもあり

俳　さゞ浪や近江表をたかむしろ　其角

△泉(いづみ)　△泉殿(いづみどの)　△瀧殿(たきどの)　泉とハ水の流(ながれ)をいふ〇泉殿ハ水の流れをひきてかけづくりにたてたる家ニ殿とハ家の事也　瀧殿ハ瀧をこしらへなせる瀧のそばに建たる殿也

歌　堀川百首　永縁
結ふ手の袂ちかく成ゆくハ
いづみに秋のさむくやあるらん

續後拾　泉辺避暑　公通
苔のむしろ岩ねすゞしく底さえて
下まで夏もかよハざりけり

雪玉　水風晩来　顕季
夕ばえは結ぶ泉もうはまさる
しばしうく風涼しかりけり

散木　對泉忘暑　家経
下くゞる岩ゐの水のあればこそ
あふぎの風をかる人もなし

月清　對泉述懐　俊頼
身のうれに心をかはりたる歎をハ
いづみの水もえやハ清ぬべき

玉吟　深山泉　家隆
人かくれ清きの夜に志きるまゝを
住るまけれし山の下うゑ

雪玉　樹陰翫泉　贈左大臣
松かげの岩まの清水むすぶまに
わづらひひとつは秋かくれなり

玉吟　夏向泉　家隆
結ぶ手に岩ねの清水あかなくさへ
袖もすゞしくさまりけれ不るせ

山家　向泉待友　讃岐
むすびのゝいくよ身のほどを結びは
庭なる新も君をまつらん

㊂流し。湧く。湛る。出る。洩る。松
陰の清水。岩井の水くゞる。万代を結ひ
ける。蛙。本陰。山陰。谷。庭。露。せ
きとめかねされ。なる岩ね。夏の
よそを。りの山の流。人だにも来ぬ岩
ほのぬ。かくしらに岩ねのしうづ。

㊄本はなよう流れにむかふ泉かな　宗祇
ゝかく人の心をわくる泉かな　紹巴

㊅夜皆のあつさを掬ふ泉より
まふ結ぶ人ぞよきの我なる

△清水（しみづ）
△清水が源（みなもと）　△清水むすぶ
△清水せく　△清水くむ
○石間（いしま）にある清くとめる水を
云　源（みなもと）はこゑらうりしをりむかしふよりい

手を汲（くむ）まゝ清水汲も同じ擬
ゝれせ入ることもならぬ
いなびこしせられてもある

㊂さぞありまて入相間日そ空にある
紙の清水に結びつるまくて　仲実

㊄凉しさに結び忘るゝ清水かな　宗祇

㊆みな浸すとつゝむ清水かな　沾魚
名ふてに流まで石つる清水かな　荷兮

△雲峰（くものみね）　夏の末に白雲そびへ
のありて見よとみれおそし
時の間にいろ〳〵に替るなり
午より後に多し此雲高く立
のがり山よりはなきて下の根をと
らず次第に山下くる〻れバやがて
夕立となる

㊇夏雲多奇峯（きほう）　淵明が詩なり

新題林　為綱
㊂高きにはおなし新をあつまさなるゝに
いとゝへのこよひたゝし山よしぞ

草菴　頓阿

山の端にかゝるを虹かとながむればそのなかばそらの雨に見えわたりけり

㊥冬ぞらの雲まもすむと見る月の影　肖柏

㊗あたゝかハ雲さへまゝが空の影　寉臺

〽虹はよいくにある雲の峯　蟻竹

〽ついと出て消てありや雲の峯　息交

時令

此部ハ六月一ヶ月の時候にかゝる事をあつむ

土用

（四季に寄旺す）三月六月九月十二月の節に入十三日め土用の入とすべて十八日なり四土用合して七十二日四季すべて七十二日宛一年三百六十日なり十九土用といふも子より後に入るハ日数を云ニ十九日といふも昼夜を合して正しくをれハやはり十八日と土用ハ夏を以正とを何ぞ数るまへ云春ハ木之土に木と恐で数壽なるに秋ハ金にて冬ハ水より金生水相生の間にあれハ感ずる事也冬も亦木より生春の木との間にて水生木なり是によつて春秋冬ハ土用の土専なる事不能故ハ夏ハ火なり秋ハ金之其間ニ土用あるを以て正しく九夏の火より火生土と土用を生じ土用より土生金と秋金と生ずと一年の間なるハ中央の土一令と爰に掲て五行の序とするはそのゆゑなり

土用天氣

東風ハいつまでも雨ふり成るなりのなれハ土用にハ空晴て東風久しく吹ども雨ふるられ是を青ぞらとも白ぞらともいへ然ども久しく東風のふけれハ終にハ雨になるなり

土用占候

土用中晴天つゞけば五穀豊年なり久雨ハ悪し○夕立ハよし○土用に入三日めを土用三郎と俗諺にいふ此日を

ガラス使用

土用中の天氣定らん雨ふらぬことあるうへハ曇るとハ土用中の日和よしかるらん晴天なれバ土用中日和は○稲（いね）の豊熟（ほうじゆく）土用を専大切なこと此節の日和つゞく暑強なれハ虫生せんよく實のる

辟瘟疫（うんえきをさくる）（土用ニ甘菊（きんぎく）赤小豆（あづき）を井華水ニて用ゆれハ年）中疫疾の患なしといへり

㊗（補）にんにくの蒜ハ清水の心ある　其角

△夕立（ゆふだち）　凍雨（とうう）○暑雨（しよう）△白雨（はくう）○雨のふる理ハ本篇ニくわし

夕立の事ハ和漢の書ニ正理とぬかりしるさいなし龍のふるれどいふハ妄説（もうせつ）なり夏月いくばくの夕立ありがらし豊（ほう）さとくも龍あるべしやそれ雨ハ地の水氣下ゟ天ニ上りて陽氣散してふり下るなりたとへバ其湯氣ふれてふたのうらニて滴（しづく）となし下るが如し大暑の節ニをりてハ天のなどとなるべきの陰氣となれバ高遠（かうゑん）ニあり其下ニ陽氣こもりごとく陰氣（いんき）のふたとしとなるべきまで上らずして陽氣散ぜざるゆへ長雨なし或ハながくふりつゞき曇（くもり）ても陽氣つよくしてこれを散ぜざるによりてなく晴るゝ夕立とて暴雨（ばうう）ふることハ地の湿氣陽ニむし立ちのぼり陰氣のふたなけれバちれども下ニむし立る氣そるむじき時ハ中途（と）陽中ニ水氣とゞまり散ぜんとする間ニ下（す）より殷くむしのぼすと甚しきによりかくなり下らるゝそれゆへて其水氣のあつく集りなる間のと降ニより一丁二丁の間ハふる所とふらぬ所あり其水氣の上るハまのあさ見山くニもゆる白雲まで雲の峯と詠ところのもの是外よりこれ

を空より出し雲のごとくなれども左にあらば水氣を陽氣にてむしのぼさせて次第に立上り下より暖く上ると時ハ白き氣集りて山どこの所次第に黒くなる是いよく水氣の多く上るによりてなれバ雨ふる或ハ白雲わし中天まで高く立上らで横へなびけるハ雨ふらず其故ハ下よりつぎ上るを氣止むによりて上りし水氣も陽氣にて散ずるゆへ横へなびくなり山どこの根よりくもふらざるも上る水氣つきたる故なれバつぎ上るべき氣なきによりて上へ上りがたるも散して雨ふらず山林多き所ハ水湿多きによりて度く夕立をなす山ありてハ凡山ハ水氣なし富士山など山のふもとより中途までハ材木あるによりて地中より水氣上り雲をかくる

くもつてきぬに雲なし山上ハそげ山なるによりてその夜電光すれバ其方角より雨ふる是も水氣の上るく水氣上るといへども陰をうりふでハ上ることあたはず陽にむされて陽氣の如く上る其陽氣発出する時ひかりて火のごとくなるを見るべしけむりハ黒しといへども火災などにて多くをあらそ本性をあらハしてあらし 先も陽氣の上るけむりなれども黒し 故に此ゆへなお方より上るその烈しき時ハ直にふりゆるゆるなる時ハ翌日ふらん

（秀）新古今　公経

露すがる庭の玉ざさうちなびき
一むら過ぬゆふだちのくも

千首　夕立早過　後柏原院

なるかみもやたゞ此のまれ夕立乃
くもをともさそひて氣はまるらん

玉葉　旅夕立　伏見院

糸川をくゞる岩木のゆふだちみ

ガラス使用

神そゝく河へも夜るの秋の山

續古　村夕立　知家

蛍かり火のけふりを誘ふ夕立の
くもれる色やさらの山かけ

玉葉　行路夕立　基氏

とまるへき宿しなけれはそなくと
ぬれてそゆかん夕立の雨

㊂詞　稲の葉。風さわく。雲は立のほる。
はれ行かく。虹のかけ。夕立。いそ
き里人。夏もあきのあへぬ。さわく村
雨。そゝぐ。かきくもれ。新涼しく
雨晴あし。式里

㊂連　涼絶とつくや夕立ハ天は久　宗牧

㊂俳　夕立やはなひけ迎ある堂　其角
〽夕立や内裏なく　ゆうしうて　仝

㊂狂　ゆふ立のふりかくはるとも子迷ふ
うけるかんへき神合祥る　常林

㊂詩　白雨五字對句

・竹・怜・新・雨・後（タケハアハレムシンウノノチ）
ユフダチタケクスヾシ

同上

・万・壑・驚・雷・起（バンガクキヤウライオコリ）
カミナリ山ニヒヾキ

山愛夕陽時（ヤマハアイスセキヤウノトキ）・・・千峯鳴雨過（センホウメイウスグ）
ユフ月ノヤマノクイ　山〻ヲフツテユク

㊂詩　白雨七字對句　詩礎

雲開星月浮山殿（クモヒライテセイゲツサンデンニウカビ）
山上ノコテンホシノヒカリ

・喧・雷・霆（カマビスシライテイ）
ライノコヱ

雨霽風雷繞石壇（アメハレテフウライセキダンヲメグル）
ライノコヱイシダンニヒヾク

・抱・殘・虹（イダクザンコウヲ）
ニジハレル

㊂詩　白雨之詞　唐　韓偓

猛風飄電黑雲生（モウフウヘウデンコクウンセウス）　風ハゲシク　ソラマツクロ
ニナリタルブ

霎霎高林簇雨聲（セウセウタルカウリン　アツマルウセイ）　タレトニ
オサツト雨フリ来ノ又ブ二夕立
ノケシキヲミルガゴトク作リタリ　夜久

雨休風又定（アメヤンテカゼマタサダマル）　夜ニデフツテ雨モヤミ
カゼモオダヤカニナツ
タルブ

斷雲流月却殘明（ダンウンリウゲツカヘツテザンメイ）　クモキレ〲ニ
月ノホノミユルケシキ
ヲヨクウツシ得タリ

△露涼（つゆすゞし）　つゆとしたゝりハ秋の季なれ
涼しの字を加へて夏とす

△夏露（なつのつゆ）　つゆハ秋のものなれと
夏の露とよむ時は

ガラス使用

せべの夢はおきたる躰なきよし

㊁千首
しげりあふ森の下葉の露ながらまさらへくる薫のしたたり　為尹

夫木
夏若の葉末さきの下の葉ちりつもる窓のやましのこゝやしかまし　為家

△風薫（かぜかをる）△南薫（なんくん）。古文に薫風自南来とあり六月にふく涼しき風なり

㊀連　風かをる夕々や涼のもてなり　紹巴

㊀俳　帆をかける鯛のさしみやかをる風　其角
〈漆〉若芽やその風わが家に薫る風　百川

△青嵐（あをあらし）△青東風（あをこち）土用のころ空一点乃くもりもなく吹風をいふなり

㊀俳　鯖乃井よく迎ひて青嵐　一鳩

㊀詩　薫風五字對句
堪露飛堯酒　清暑澄潭月

薫風入舜絃　閑懷謝風

㊀詩　薫風七字對句　詩礎
毫端蕙路滋仙草　逐風輕
絃上薫風入苑春　水亭開

△暑　△溽暑。熇暑△極暑、蒸暑。酷暑。炎日、炎蒸。燻日。熾日。烘月。炎熱△炎天△あつさ△あつ

㊁新撰六帖
水無月のてる日にわれつらのわきもこのあつさの夏いぢり遠くなり　行家

新題林
蜀すさいの清くてりはぐ雲いあし　通茂
とまだ日へ今まよれは比ことなて暮日

㊀俳
〈扇〉ゐさ井けりくあつさしもあつさ哉　十六
〈扇〉ゐるに西日に出でしつさに　麦林
〈桃〉桜の葉かげの男の暑さかな　一九

（狂）宅よりも百倍あつき堂を身ふこゝろ月の、私ぞあらし　是藤

△月盛（俳）日れ盛れ牛乃地獄や月の宿　井雨

（詩）夏晝偶作　長孫佐輔

南州溽暑醉如酒隱几熟眠閑北牖（暑氣苦シム堪ガタク酒ニ大ニ醉タル如クヘドヲヒラキワタシテ几ニヨレバ神氣ツカレテオボヘズムマノ子イル）日午獨覺無餘聲山童隔竹敲茶臼（ヒル頃ニ寐タツテサメタレバトコモレツカニレテ物音ナシ童子ノ案ノ臼ノ音ノミ竹ヤブヲヘダテシトナリニキコユルハカリナリ）

（状）訪暑日起居文（右ハ尺牘ナリ）

不堪大暑之候愈

熇暑逼人　蘊隆

清涼福祉益御勇健

動定佳勝　多快〳〵

御水園一時清々々

謹献某物

竟以暑中為御見舞之

聊訪問

而已可得貴意

而已

尺牘　各替上中下

熇暑逼人　赤日流金○溽暑

鬱蒸○炎令熾　審動定○起

居平安○興起遲寧○平生之

休暢居止之祥　多快　慶幸○愉

然○欣躍○健羨　謹献○以投

○送之○聊具㊤捧呈○献呈

○奉上

訪問

㊤窺光霽之志

㊥訪起居○報平安

(校)同報答　左ハ尺牘なり

以使札暑氣為見舞[illegible]

労介使訪炎日　被恵

鮮一桶[illegible]不浅

魚醢一器　幸饗供膳

存[illegible]賞味仕

之客　美味可賞　殊恩

[illegible]加減[illegible]

須謝

猶[illegible]面上[illegible]

暫待来會

尺牘

書替　上中下

労介使

傳命○走使

炎日

燻

日○熾日○蒸暑

被恵

㊤厚貺

嘉恵㊥被投○分賜

魚醢

魚醤

○美肉

饗供

㊤偶有客至共

適口㊥以饗客

美味可賞

㊤口

美可愛㊥殆潤藜莧之膳

殊恩

須謝

㊤拜而受之㊥愛我至矣

㊤九拜以謝

暫待来會

㊤期顧

問㊥叩謝以面○待問尋

ガラス使用

真瓜（マクワ）ヲウカフトキハ園瓜𪜈黄瓜𪜈カクベシ異名ニハ玉質（ジツ）氷漿（ヘウシヤウ）黄花ト
アリ青門東陵（トウリヤウ）ナドハ瓜ノ出ル所ナリ
西瓜ノコヲ緑蔓（リヨクマン）トツカフタリ○納涼（スゞミ）ニハ
襲（ヲソフ）清風ニ橋下ノ流泉又ハ披（ヒラキ）襟ヲ林下ニ
ナド、有ベシ暑ヲ避ルニ蓮葉ヲ取リテ
コレヲ杯トシテ酒盛リスルヲ飲碧筒ト云
棚ヲ結テ日（ヒ）ニ敝（ヲヽフ）ヲスルヲ張蓋トイフ

△図 凉（すゞし）

（哥）ハ凉風 いづまでも夏をくす

夫木　野亭夏朝　為兼
朝風はさゆる夜竹のもとへそよぐ
そこともわかぬ世の色のすゞしさ

嘉元千首　山家夏　為相
とぢさいのくすのはしげき山さとの
まつよりおつる瀧のしらあふ

古今六帖　公朝
わふきさゝろわか大君の風なれは
これもすゞしきなれうちわか

夫木　樹陰如秋　仲正
この木陰みたらし清水うらへの玉かしはれ
そのかげいろゝ秋にしるる

（俳）くゝとせて涼しき影にしむうす　芭蕉
涼しさや先むしりよりどの宿　其角
涼風や与一をまねく女ふね、　仝
汲くのすゞしさや此れの声　親重

納涼（ドウリヤウ）（すゞむ すゞみ）

（哥）新古今　恵慶法師
のうきうるとさいなるへさを
秋宮の雨ふりそろうろのその
まつみんすくひさんなかなり

同　太上天皇
山里の峯の雨雲とだえして
ゆふべすゞしき槙の下露

拾玉　毎日納涼　慈鎮
とくむすぶゆふさきをも一たえも
いづみの清き岸の松風

建保百首　樹陰納涼　定家
さゞ川のやせつきう下にかくろへて
人なをもとに秋風ぞふく

家集　山陰納涼　梶井宮
世秋秋をおりし山は静なれは
身をおく山のかげぞ涼しさ

月清　松下納涼　後京極
蝉の羽にうすき衣の夏暮れて
枕をゆかとせる庭乃まつかせ

續千載　森納涼　為氏
すゝしさは夏を忘るゝこゝろにて
秋風ちかき夜半のもり

㊂詞　涼しい風ー。い袖ー。衣すーし。水清く。
山陰。木陰。森の下陰。納涼の手ずさみ。
よふかくまつる松風かよふかも。山下水。
手にむすぶ潮。玉ざゝ。すゞしき。
泉清み。岩もる水。すゞしき。岩ヶ清
あをやぎ。さくら。青葉ゞ。結ぶ手に
衣をとほす。松陰。森陰。あざく
此家。風かよふ袖。手すゞしき。夏ものやめ。
蓮芦　風　山風。夕風。結ぶ手の露。
松風。木の下風。月（月に出て涼）しらむ月。秋はよ
涼しみにまさる秋の夜。寝もやまされ人　松風。
水はなる。月林色。松かげ。森の林
すゞ人川（風水流れ手に　とよせて）そうしむ（京のそうじに　出て納涼）
すゞ。蝉　木の下風まで夏をこれて（せその声のをまつとし）　雨

あすゞて涼しき夕べのむ雨
の名ごりの雨そゝぐしくして
い風のあとそふ涼月のるにいまらげ
なりて秋ちくらのたらをとし
櫚の葉ら　竹
風の音　すゞしさ　枝　樹（其）海邊　湖　瀬　森林
ろくかに涼し。夜涼し。涼しそ紀。
影を逢。鷺鴨涼し

㊂連　涼しさは夜へなる木陰かな　宗砌
〽竹ぬるや登はなる翁かの夕涼み　宗牧
〽我夕を事葉ふ過庵の松　宗因

㊂俳　涼み舟とうやらむ涼しさ　其角
〽坊主に出てるかうし夕すゞみ　仝
〽客人はふ好しき夕涼み　梅竹

㊂狂　前大僧正慈圓
旅の女ゝ大涼み肩かけ夕さゝみ
ふく帷子の汗のしひしゝ

㊂詩　暑五字對句

水退池上熱（ミヅシリゾイテチノホトリアツシ／イケモカハキホメク）
竹深留客處（タケハフカクシテリウカクノトコロ／ヒトヲトヾムチクリン）
風生松下涼（カゼシヤウジテシヤウカスヾシ／マツハカゼヒヤヽカ）
荷靜納涼時（ハスハシヅカナリナウリヤウノトキ／スヾシイクノハチス）

㊂詩　同七字對句　詩礎

雲連海氣琴書潤　水殿凉（スヾミドノ）
風帯潮聲枕簟凉　青瑯玕
沙界樹凉晴作雨　着衣巾（キモノニカヽル）
石渠泉聲暗流水　凉風来（カゼキタル）

㊙暑之詞

何以消煩暑端居一院中
（アツサノタヘカタキニハシテスヾミイルトナリ）
眼前無長物　窓下有清風
（カゾヨクトフクゾ）
熱散由心静　凉生為空室
（シテアルニヨリスヾシキゾ）
（コヽロシヅカナルニヨリアツサモシリゾキカサツハリト）
此時身自得　難更與人同
（シヅカニ閑居ヲコノム心カイ）
（ヨク得心シタ世間ノモヤく）
（スル中ニハクラサレズ）

晩夏（ばんか）　△夏深る　△夏果る　△夏暮て　△夏の別　△夏に後るゝ　△夏まて後　△夏を隔る　△夏の限り

㊀夫木　　為家

夏と秋とゆきかふあひの穐来ぬとおもふ
そよとも風の吹かはるらん

秋近き　△秋を待つ　△秋を隣　△不来秋（こぬあき）

㊄志のびあかつ風や秋の色　宗祇
絃らし匂新れ水まされみるの書　紹巴

草木

此部は六月一ヶ月
くさ木の類をあつむ

△**百日紅**（さるすべり）紫薇花（しびくわ）○怕痒樹（はくやうじゆ）△猿滑（さるすべり）○皮なめらかにして猿登る事を得ざる故に名づく○百日紅と猿すべりハ一類二種とも云

△**苘麻莔**（いちびう）。白麻（いちび）。市尾（いちび）。皮をとりて布をおるに麻よりハよわくさけ安し　大縄又ハ碇のつなとす

△麻　△櫻麻（花の様ハ似たるなり　秋にもよむなり）△夏引の糸○あさの事なり

△麻刈○俳ハ麻刈を夏とする

異名　漢麻○黄麻○麻仁油ニ制してよし

麻ハ皮をそだて糸によるゆゑ

㊒　夫木　　寂蓮
賤の女が心をくしこきゐ居るゝ　さらしあさせかるかへの下風

夫木　　土御門内大臣
かりそやすをあさの立枝のまろれば　見れ末葉まよするけしきれ

㊧　わくるあとを花かさくる麻　宗祇

㊑　翔起ハ袂の夜そのかぜさへ　徳元

わきとの人影もなくて櫻麻　文荘

△苧麻○和名からむし○真苧　かうその葉のごとし花青き穂をなすも○出羽最上の産よし奈良晒を織るもの是なり東国西国共ニ多く植る畿内東南ニハきらひて麻を作らず

△綿の花　むかしは穀皮をもりて衣服とす是を木綿といふ是紙のことなり今衣服に織るものに木綿といふハ古名を用ひたるなり神人の用ゆる木綿なれども古来の言なり中世民用専ら麻布を用ゆ今の州綿ハ桓武帝の朝に異国より傳はる唐土にてハ宋乃末に至て植る本朝よりハ二百年ばかり遅し其後種を失ひて中絶したりしを文禄年中に種を得て諸国に植る○多田綿花黄ニ実白く絲なりはよく尤可けれども少なし今これをとんび○蝦手綿葉ニ深ききざみあり白花ニて桃大きくて白然れども桃少なし○神楽綿花白きあり黄なるありまじるうて生ず神巫の持ツ所の鈴のごとし

是を植て大に利あり○佐利綿は枝葉赤色を帯ぶ桃多し昔姑この種を得より聟をひ望めども種をおしんで聟憤て恨みて其妻を去りしに依て佐利綿といひならハせりとぞ○畑草綿ハその葉青色にて間に小葉を生を

（哥）新撰六帖　家長
あをしまの大和にハあらぬからくへの
うへて〳〵綿のかたよふそおりける

△竹皮散　△竹の皮脱ると云ても季にするべし

△烏扇　△ひあふぎ○本草に射干と同物とす然ども花形ちがへり茎葉あぐく弓の長さとこれりの射干ハ茎短く葉扇のごとくならびたるのひあふぎなりされども和名ふを一種として射干とかくともあふぎと訓るにより連俳にも射干とかくなり

（哥）夫木　西行
遠生ハさかるあれど庭の面に
かゝすあふきの花てあげけん

△玉簪花　白鶴山大なるものを俗に亀なりと云

△釣鐘草　地参○紫花とひらく形釣鐘のごとし又白花淡紫の花あり

（俳）釣鐘をまはほに付たる名ぞく　越人

△麒麟草　○高さ一尺ばかり形弁慶艸に似たり

△馬鞭草　○馬折○鐵荒幕。花紫色にて穂のごとし六七月花をひらくへ

（哥）夫木　俊成
紫の庭ふ遠おかれてへふきのつら
むつうけたる世ふもさられ

猫児眼睛草　○澤漆○此草の形

ガラス使用

燭臺のごとき故。燈臺艸といふ　野に多く自然と生るなり

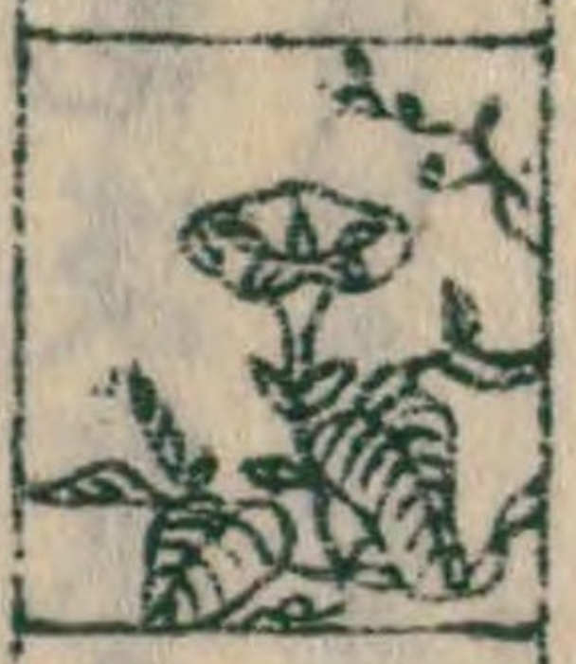
△剪春羅（がんぴ）　○春羅。○漢宮春。○眼皮ハ俗字なり

○さつき眼皮。○紅白さらさまた有　花の大きさ錢のごとし

㊀狂　人のよふかける房鄉ハあるとて　眼皮花生にいけてしも見よき

△虎尾花（とらのを）　花白し虎の尾のかたちに似たり

△晝顔（ひるがほ）



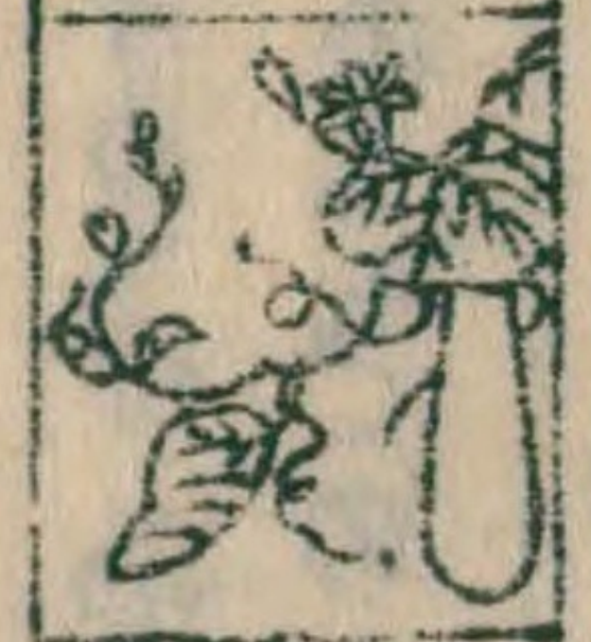
○鼓子花　○旋花

㊀排　晝顔に米搗すゞむ哀　芭蕉

晝白や睫にちらく[illegible]　魚崖

㊀狂　幸すみやの晝上りとおもひしをと　數ハ白つや花の咲つらん　兼鄉

△夕顔（ゆふがほ）



△壺盧　瓠瓜　瓢の花く

六月頃白き花開く　晝ハ萎を　夕方に咲く故に名づく

㊀家　夕すゞき方人の袖かとよ　手折ふし緑きゆふされぬも　定家

千首　垣夕貞　為尹

かくれ家の竹乃園生の垣末こえて　夕かほにむかへのえんさき

㊀詞　白扇。あのぐるくるれそめてありぐ。垣根。綺ぅ房。惟光まゐる。咲てこそ人は問われ。遠外面。猿の女房。行器。往音。紙燭。

㊀連　夕良のあがりかゝれる緑かな　宗春

夕良の花ゆかしき垣根かな　宗養

㊀排　夕良や一所の寺花の名　其角

夕かほや白き鷄垣根より　丘

夕良に雜炊あつき藁家かな　越人

㊀狂　おほかれの軒にぞひしひし夕かほや　ひさうなかりも程いかゞなり　正名

㊀詩　夕白五字對句

幸結白花了（サイハイニムスビ ハクワヲ ヲハル）（シロキ ヒヤウタンノハナ）

松虫声不去（セウ チウ コヱ ズ サラ）（ミツムシノ コヱ）

ガラス使用

寧辞青蔓除　暮雀意何如

瓠。味甘き故苦瓠に對してかんぺうと名づく形色各有

瓠のかく物ハ長ふくべなれど浪花木津難波今宮住吉あたりに作るかんぴやうハ皆炭斗かさるり一名盒盤葫盧と云かんぴやうと以ハ瓢とかくべし瓢ハヒヤウの音にまゆ浮の意こもりて酒器に制呈するを瓢といふ本ハ匏瓠ありわしかくまうて酒罍に制る瓢簞といふにて知べし

△干瓢剝△新干瓢○土用中にむきてほす河内摂津に多し伊勢より出せし味おとろく

苦瓠。瓢簞○夕顔と一類にして別種ハ味にがし

（哥）夫木 ねしろく[illegible]ぞ物するひさご杯のあまさを汲て知るらむ

商陸花　花白赤あり白花のものハ根も白し

山慈姑　俗黒くわいといふ花淡赤色此根解毒丸に加ふ

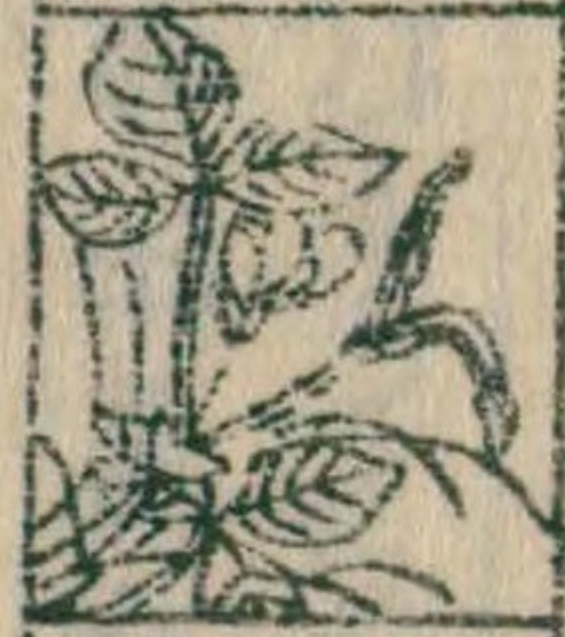
△鷺草　花白く鷺に似たり○連鷺州ハ葉大なり

（俳）花白して鷺十羽斗飛ふ形に似たり
さゝなきや雀の咽を捨て立　由光

△蒲穂○香蒲。穂の形鉾に似たり故蒲鉾といふ

蘿摩　花紫白色秋実を生ず[illegible]ちらまめし採綿に代用

△緑豆



花黄也。和名やえなりといふ

芰實　花紫。花の下に実をむすび生す

△赤

草　水草○正字地錦ハ花黄

△慈姑。燕尾草と云

ガラス使用

○形燕の尾に似たり○根は白くまるく一根に歳に十二の子を生ず

○沢瀉をおもだかとして古人乃俳偕にもまゝ見えたり誤なり

沢瀉の和名はなまゐといふておもだかの名なし

㊕おもだかの花まくらの紋所や　嵐雪

沢瀉や乃背髪し雨あかり　野童

△㊄河骨　○萍蓬草　㊕河骨や撥に赤れかゝる夜半楽　嵐雪

△㊄菱花○芰○蓤○五六月小白花開く　㊁夫木　爲家

舟とゞてたぐくも淋し青ぬまは菱とる舟や江にまよふらん

㊂菱五字對句

淺渚菱花亂
深潭荇葉疎

同上

蟾影搖輕浪
菱花映淺流

㊂同七字對句

松葉正秋琴韻響
菱花初曉鏡光寒

詩礎

翻池上
小池清

㊂菱花之詞　唐　李嶠

鉅野韶光暮　東平春溜通
影搖江浦月　香引棹歌風
日色翻池上　潭花發鏡中
五湖多賞樂　千里望難窮

日ノ池上ニサシテ花ハカヾミノ中ヨリ生ズルヤウナ五湖ニハヒシノ多キ所ニテ千里ノ眺望ヤムヿナシ

蓮花△はちす　蓮房の蜂の巣に似たるゆへ名づく　△白蓮△紅蓮△水芙蓉

異名　花君子。藕花。水花。風露郎。△池見草　△露堪草　○蓮は泥より生じてさらも清浄なり性糞溺を忌む周茂叔が云く

ガラス使用

菊ハ花の隠逸なるものなり牡丹ハ花の富貴なるものなり蓮ハ花の君子なるものなりと

（家）文治百首　　西行
ちりもなき月のひかりをまとひ池はところどころもさく蓮かな

夫木　蓮開水上紅　千里
秋近く荷（はちす）おもくなるみなかみはくれなゐふかく色ぞこぼるゝ

山家　蓮滿池　慈鎮
そのかみに月やうつらん浪もなし池は蓮乃花さへもなり

（詞）白き濁り流さず。風薫る。蓮葉は露おもへらぬ月。蓮は露をなふけ中ゞさ（歌よみ）蓮の臺（うてな）。蓮の上よやど濁。たゞの池の中ゞる。蓮は露（ところの）そうて（きよき露を／読みなるべし）池水の濁りにしまぬ心ぞ。ゆふまる。宿（金の花ぞそよ／涼しき休そも）清は花。

（連）香とちて花の香重き蓮かな　宗養
濁りにはそまらぬ涼しさそよす蓮かな　宗回

（俳）出女が葉に欺かれしも蓮かな　其角
泥坊の寿さへ水のそゝぎかれ　仝

（狂）花瓶にもさしてよ花ともしらずまちすぎてこいぞうつくしぶらうく　宗増
おまへの蓮なふひかへとのはつれ生佛とや人もいはまし　種好

（詩）蓮亭對句　同上

白蓮吹次鈌（ハクレンスイレカケ／ハチスノハナニカケ）
稲花千頃外（トウクハセンキヤウノホカ／イクウ子ノイ子）

香藹坐来清（カウアイザライキヨシ／ザシテヨルハチス）
蓮巣両池間（レンサウリヤウチノアイダ／イケノウチノハチス）

（詩）蓮七字對句　詩礎

蓮花直撲青天色（レンクハタヾチニウツセイテンノイロ／ソラニカホルハチスノイロ）
玉女常含白雪愁（ギヨクヂヨツ子ニフクムハクセツノウレヘヲ／ミサホノルニシテクシモイ）
波廻片々青蓮出（ナミメグリテヘンヘンセイレンイデ／ナミニハカヽミルハ）
日落山々彩鳳飛（ロツチテサンサンサイホウトブ／ユフクレニトリガトブ）

渚蓮愁（シヨレンウレフ／ハスレホン）
上蘭舟（ジヤウランノフ子／イクノフ子）
識采蓮（レルサイレンヲ／ハスヲトル）
採蓮舟（サイレンノフ子／ハスマルルフ子）

（詩）採蓮　崔國輔

玉漵花争發　金塘水亂流（花サカリナル頃ハ水ノ流モミタレサワグ）

相逢畏相失　並著採蓮舟（花サカリノ頃ヲノバサバ花ノチリ失ンヿヲオソレテチラヌアイダニトリ遂ント舟ヲモヨホスナリ）

（詩）又　明　申時行

碧沼停寒玉　紅蕖映緑波（白紅ノ蓮花ガサキテミドリ色ナル池ニウツルナリ）

糚凝朝日麗　香逐暁風多（花ノ色ハ朝日ニウツクシク香気ノ薫シワタルハ夕扇ニヲホレ）

游戯金鱗出　飛揚翠羽過（ヲヨグ魚トヒカケル鳥ケフカキリナシ）

納涼依水樹　還續采蓮歌（スヽム所ハ水辺ノ臺ニアソビウタヲツクツテタノシムナリ）

（詩）曲池荷　盧照鄰

浮香繞曲岸　圓影覆華池（香氣紛紜トシテ岸ヲメグリ圓ナル花ノカゲイケノオモテヲオホヒカクス）

常恐秋風早　飄零君不知（秋早ク花ヲチテヤブレ蓮ト今ニナランヿヲ知ラズシテナガメタマハントナリ）

○金絲蓮　紅花金色の筋あり甚だ珍なり○大紅蓮　花淡紅色芭蕉の花に似たり花ありて実のらず○天竺蓮　花紅千葉一列よろしく昼夜しぼまず○蓮ハ子の名なり菡萏ハ花乃名なり茄ハ茎の名なり藕ハ根の名也荷ハ葉の名也俗にいへる

△荷葉　浮葉を藕荷といひ立葉を芰荷といふあるひハ葉を荷といひ根を藕といひ花を蓮といふ荷縺水芝

（哥）夫木　定家

ふるさとゝ人まきの立葉乃かぐふしも
あきよのつけハ風ちらしけり

（連）香ぞとらざれ見ひをすゞ風香風に露

（俳）ほられて水ものびるさらすな　野鷺

ガラス使用

〽蓮葉や雨たまる跡の水かゝみ　道之

〽えき花そ蛙の声もなかりけり　風光

狂 君子とも呼れし花の蓮の葉は泥くへ味咲そはさみしあんしぞ　貞古

詩 荷葉五字對句　同上

緑水飯香稲（リヨクスイ ハン カウ タウ）　依崖假松盖

青荷包紫鱗（セイカハウシリン）　臨水羨荷衣

詩 今七字對句　詩礎

桃花尚憶當年宅　荷花香

荷葉堪為卒歳裳　聞芰荷

（文）新荷　唐　李羣玉

田々八九葉散點緑池初

（ハジメテ葉ヲ生ズ）両々嫩碧纔平（ニチラく見ヘルナリ）

水圓陰已蔽魚（葉イマダ若葉ニレラ水ノ色ト）

同シ然レ圧丸キ葉ハ　浮萍遮不（奥ヲオホヒカクスズ）

合弱荇繞猶踈（ニウキクサハ荷葉ニサヘギラレテ）

合ズアサヾノ水クサモグリオホバ二疎々トハヘテオホカラズ　半在春

波底芳心巻未舒　ナカバハ波ノソコニアリテヤガテノビ出ベキキザシヲフクメリ

△藺花（いのはな）○虎鬚草（こひげ）○碧玉草（へきぎよくさう）燈心艸（とうしんさう）○季ハ多く四月とし

分 失木川ふるすや河ふちのおくへき とりてかわかし一夜ねさせよ

とうあんて製するハ小刀にて持て指にそ押へ皮をむきて燈心を出すなり凡六寸ぐらそ燈心半寸出るを上品とす

△刈藺（かりゐ）土用に入て刈とり畳の表に用ゆるハ備後を上品とす女のすぐまで此業をそめ一日に二枚うくざる女ハ嫁入なしとかり

席草（せきそう）是ハ琉球とつふて同じく畳の表にまうつ

下品なり

△刈萱(かりやす)を土用に入晴天二三日ほかし上ぐれバ色よくす夕立にあへバ色あしく又び入なり

㊂万葉 皆人の笑ふとかるかやの露も見えんとぞおもふ　人丸

△藍(あゐ)△刈も夏なり二番刈ハ秋なり京都の産を上とす根をはなさずして刈るゆへ日数ごとして用ゆ色うつくし阿州に多く作る其葉も大なり

㊂新撰六帖 刈あへず宿の藍のそこなれバあくを深しいろぞまさるる　知家

(俳) 海原のかもをそむるや藍畠　嵐雪

△楢茂(ならしげり)○秋ハ葉紅(こう)くなるゆへおほかたもみぢ秋の季也

㊂新撰六帖 夏の月の夜もいそぎゆかたちのならのしげみに涼しかりけり

(連) 夕日まぶしき蝉の声もなし　紹巴

(俳) すゞみハ橋の上から鍋の尻　吉水

△青田(あをた) 六月青き田ハ景よき物なり詩にも作まへり

(連) 夜山のきりハしもまよひ門田哉　紹巴

△田草取(たくさとり) 五月の外也

△蘆茂(あしげり)(連) 蘆かりあひて江の水わきまれ流るゝか　紹巴

(俳) 石の葦もつれてぞ露の風に　素白

よしあしを見分ぬ男哉　右二句 憲

△林檎實(りんご) ○文林郎果(ぶんりんらうくわ) 来會(らいくわい) 委くハ三月の部ニ

(俳) 出るゝ五色林檎至て上品なり

手ふさうも林檎ハ秋で西に近　其角

(詩) 林檎五字對句

艷和蜂蝶動（エンクワホウテフウコキ テウノ カタチ）

香帶管絃聞（カウタイ クハンゲンキコユ アンマク カホリクル）

△早桃(さもも)(俳) 扇ふもの ぶらや 秘女桃　貞徳

ガラス使用

△青鬼燈（酸漿草）　△青番椒

俗に南蛮胡椒。又高麗胡椒と云　秀吉公伐朝鮮時渡る故名付くり

△蘘荷子　俗に夏あるを夏めうが　秋生ざるを秋めうがといふ

△凌霄花　異名　紫葳。陵時　夏より秋まで花を開く

㊓ のうぜんの咲ハはさう人妻のうげ　風鈴軒

㊕ 凌霄花之詞　呉震生

素娥昔日宴仙家（素娥ハ仙女ノ名。酒ニ）宴セシトキ
酔裏従他寶髻斜（ヨフテ髪モカタフキタリ）
遺下玉簪無覓處（髪ヨリカンザシヲオトシテ尋レ共ミヘズ）
如今化作一林花（今其カンザシガ化シテ此花トナリテ咲出シト戯作シタルナリ）

△風蘭　桂蘭。仙草。風を好て茂る故に名づく

㊓ 風蘭や風ト汐見坂（花黄色）　つらく業ト如柳のこく

△神馬藻　飾るハ歳旦より

㊇ 夫木　信實
いろ〳〵に浪よゆられてなのりその　末乱よいそうへまし

△豇豆　△小角豆　△青さゝげ　△十八さゝげ。花白し

㊓ まうれしあもさゝげの垣根から　半良
さゝげから大豆にうるまとそくゝ　江町

△瓜　種類多し多く五月に記す

△甜瓜　甘瓜。果瓜。美濃真桑村に作る瓜を上品とすこれによつて今瓜の惣名とする也京の東寺瓜江戸の鳴子瓜尾州の青鷺瓜を上とす駿河の府中摂津の水野和泉の堺舳の松これら皆名を得たり

㊓ 習ふれ雅楽のさそ瓜の枝　其角

ガラス使用

〽あの甕ふ温公さへやま棄瓜　趙波

（狂）名つとてちごうりに迷へ入瓜白留
先へ渡さハ彼ら仇まくら　千稲

○人〻集りて万法ハ空也と法問を出せし時寂蓮法師（御もと）
皆空よなりへきまめるしくいぞく
此瓜は皮しあさどともあり

瓜皮

松山侯の御前にて瓜の句ハ有べく皮まて發句せよとありける時其角畏りて

（誹）瓜の皮むいも捨ぎに流しけり

△白梵天（しろぼんてん）

△梵天瓜○瓜の種類にて白く大和より出る皆白色なり

（誹）梵天の瓜や味ふ香はさん　桂葉

（狂）名をきくも思切ぶりの面影が梵天瓜ぞよう人饗つたなる　高壽

（詩）瓜五字對句

・酒榼（シユカイ）縁（ヨリ）青壁（セイヘキニ）　サケノウツハキレイ
・几（キハ）攤（ヒラキ）梅福傳（バイフクガデンヲ）　メツラシキシヨモツ

・瓜田（クワデン）傍（ソフ）緑谿（リヨクケイニ）　タニノホトリノウリ
・園（エンハ）摘（トル）邵平瓜（セウヘイガウリヲ）　コヱンノウリ

（詩）瓜七字對句　詩礎

・羽扇（ウセン）搖風（カゼヲウゴカシテ）却珠汗（シユカンヲシリゾケ）　一ヘキノアフギノカゼ
・動金花（トウズキンクワヲ）　コガネノハナ

・玉盤（ギヨクバン）貯水（ミヅヲタクハヘテ）剖甘瓜（カンクワヲサキ）　ミヅニヒヤシタウリ
・鄭州（テイシウ）　ウリノナ

・白社（ハクシヤ）可容（イルヽベシ）陶令酒（タウレイガサケ）　サケクミカワスト也
・故侯瓜（ココウノウリ）　ウリノナ

・青門（セイモン）堪種（タネウユルニタヘタリ）邵平瓜（セウヘイガウリ）　サカリヲウヱシコジン
・五色瓜（ゴシキノウリ）　ウリノイロ

瓜故事

青門（セイモン）

邵平の名東陵ともいふ瓜ノ美ナルヲ出ス昔邵平（セウヘイ）秦ノ東陵侯タリシガ秦敗（ヤブ）レテ後布衣（ホイ）ト成リテ瓜田（クワデン）ヲ作リシトナリ

△干瓜（ほしうり）

白瓜を干てたるをいふなり四五月出るといふハ小くしてよからず六七月出るハ大きくして色青き

ものぞよろしとす大坂の東黒門といふ所に作る上品とす唐に青門瓜上品とある又偶然なるゆへ

（俳）手瓜やくわやなて干す篭に盛　其角

△熟瓜　甜瓜の種類　味少し劣る

△菜瓜　甜瓜の種を蒔て菜瓜に変する物有

△（秋）南瓜　寛文の頃本朝へ種を得て長崎に作るそれより諸国にひろまる形ち丸くひらたくして南蛮よりきたるをもつて南瓜の名あり

△（秋）南京瓜　南瓜と同種類にて形びぜんとくりのごとしかぼちや唐なすびともいふすべて胡地より其始出しをもつてなり

△（秋）阿古陀瓜　かたち南瓜のごとし是は甜瓜などのごとく煮ずしてそのまゝなり

○南瓜○南京○阿古陀等夏の季ともあり又秋の季ともす通俗志其外多く秋に出せり○花として夏に用ひ花とせずして秋に用ひて可ならんか所存によるべし然れども時珍が説に南瓜など八九月花ひらき瓜をむすぶとあり是まで花として季に五月とあるはいかゞとこゝろ得のことなれば記さず

△楮花　△紙すき草○楮は製して紙にする木なり黒ひやうをもちゐ上紙にするつちかきといへるは防州にて多く作る白ひやう青ひやうなますとなど其外数品あり

○秋葵ともいへる草あり楮とは別なり五月花咲くあふひに同し

△紫蘇　△ちりめんぐさ　赤蘇○桂荏○塩漬にして食ふ大小二種あり

ガラス使用

△**蒜根** 夏とりてたくハへ食毒を解し悪瘡に灸す

葫荽 夏実をとる生なるハ香あしされども悪臭をよく去

香あしきものを食て後この物を少しくらへバ忽ちあしき香さらるゝなり

痘瘡けがきを去る法 この実をせんじてかべにそゝげバたちまち痘瘡の色あしきもなをる也

△**糯実** ○粘糯 ○糯膠

糯樹の皮を剥き水にひたし搗かすを去りて制る

△**夏切茶** ○茶を賣處の家六月新茶を壺へ紙にてかく封じ壺ともに賣なり是を買ひ封を切りて遣ふなり

種植

此部にハ草木植るへ壅培収採などの事をのす

△**種植** 先月にあるにおなじされハ今月も蒔べし

茄子とふゆる法 花の咲く時分その葉を取りて四ツ辻に捨そのぐるりを丸く灰をかきあげて其上を人にふまれバしなをびたゞしくさんになるなり

壅培 橙。たちばな等に茶のの灰羊の糞とつちかふハ実なる事おゝし ○菊にハ土用の後こやしをかくべし

灌水 此月暑氣はげしく日中に水をそゝげハかるゝ晩にハおそく朝ハはやく水をそゝぐべし

収採 麻苧○燈艸○席艸。右の分此月刈べし

生類

此部にハ六月一ヶ月の生ものとあつむ

△**燈蛾** 燭蛾○火蛾○飛蛾○形黄蝶に似て枯渇なり云ゝ

ガラス使用

△蟬の諸聲　多くかまびすしくなくをいふ

△蟬脱　△空蟬○蟬の皮をぬぎすてたるといふ○空蟬もせみの皮をぬくといへども又生るせみともいふなり

△夏虫　㊁夏のもろ〳〵の虫をいふ

新撰六帖　光俊
法よさく火に入よりの夏むしや
思ひもなき絶るかゝらん

㊟夏虫ハ夢ある名のことかいてあり
き披見まいるて可笑さ貞因

△殘蠅　○蠅ハ秋までものこりあるまじきも　季ハ六月なり

△金龜子　蚊蟆　蜣螂　△鳥毛虫　螺蚧○蜈蚣○髯虫

△蠓　俗ニ水道蠅といへるもの夏酒あぐれば生じたるものゝ

△蠐螬　一名地虫又根堀虫○おほく土中ニ生ず又蠹土中にも生ず形ハ毛むしのごとし

△練雲雀　卵を麥畠の中ニ産むなりといへども、ごりとびくぐりてあるなりそうるかひ直ニはもろくふ下らず先五六間も脇ニさりて歩んて常のとをりくさ里へ入るゆへ網擢の禍ひなし○此頃毛をかへてうつりかへたるとあしたきるてのそれを練雲雀といふ

○一説ニ音を入るひばりのことをいふ

㊒菓ふたのむ麥刈ちかに鶉雲雀鋪

△鷂鷹　たかにひばりをとらする暑中ハひばりの羽をかゆるころなれハ飛こともよはく取やすし

△川狩　△簗○四手網○投網○繰網等ニて魚をとり遊ぶをいふ

㊒そり大抵ハ鮎をとる事なり
川狩やいまにもいさを汲て嶋　梨里

△**鯖鈎**（さばつる）　青魚。其色青し故に名づく　大なるものを鰺（あぢ）魚（ぎよ）と名づく　和名あをさばと いふ　海中にて獲るなり

△**海月取**（うみげつとり）（家）　△海母（うみはゝ）これともかく　仲正

我恋ハ海の月をぞまちわたる
くらげのほねにあふよありやと

必用

此部ハ六月一ヶ月必入用の叓養生の法等を集む

破（は）軍（ぐん）向（むか）方（かた）

暮六ツ　午の方	夜九ツ　酉の方	朝六ツ　子の方	昼九ツ　卯の方
夜五ツ　未の方	夜八ツ　戌の方	朝五ツ　丑の方	昼八ツ　辰の方
夜四ツ　申の方	夜七ツ　亥の方	昼四ツ　寅の方	昼七ツ　巳の方

日刻（にっこく）（日のうちよき時也）　未（ひつじ）の日未の刻事をなすともふ用ゆべからず　月建え

出行作事（しゆつぎやうさくじ）（よそへゆき又ハものをつくるによし）　東の方へ向ひて　今月天道

東ハ行くが故なり　又ハ西北の方へ行くにハ用捨あり　味方よしてハ利なし　敵となりてハ利あり　西南ハ味方なり利あり

樂事（らくじ）（ゆさんのなは）　詩にも六月徂暑と いふなり　朝早く起出て見るときハ蕣（あさがほ）の咲るさかりハ蓮の花さかる　寺院の池清らかに香ひふかし　折くハ雲起りて夕立のけしきも一陣（ひとしきり）ふりくるあとの木々のかをりきまぶかゝる心もゆく迄　〇水の筧（かけひ）に清く流音（ながるゝおと）

天氣　當月ハ長雨ふる事すくなし雲出 雨を催（もよふ）せども天の陽氣つよければよりて陰雲の氣消（しやう）して晴になること多し　此月能天氣となるハ朝東風ふくを朝あらしといふ　四ツ時（どき）分より次第に南へまはり西にかゝるとまぜといふ　此風ふき出せバ雲も晴て照（てり）つゞく　五穀豊熟

とそれより日暮まで次第に北へ替り北東風にかゝるなれど夜北とらへ昼の照つよき吹さば露をおろし稲に甚よし此天氣つゞく時に折々夕立して人病もなくなし

風　申酉より吹を西まぜといふ日和つゞきばよし○未申より吹を沖氣といふ朝ごくれ曇れども日和つゞくものなれども日々に曇り雨げしけにこまる此日和長きものぞ其うちふとふり出せバそれより晴るかと思へバ未申れ沖より雲をおこして雨となりくしていづまでも長くなきはくものぞ○北西の風とあなぜといふ雨ふらず曇など夕立もせど○東風はげけて吹へバ雨になれども夜露をあげぬぞ○東北の風久しく吹て空晴るゝと日和東風といふ

十日も廿日も雨ふらず然れども終ハ雨になるとしるべし○東北東南の風にて曇れバ混氣なる下地なり

雲　（南西）に白き雲出て東へなびくまぜ雲といふ晴天はぐさ夕立あるどして稲に宜し

朝霞　東方日出んとするまへよりあかく久しくされハ是ひでりはげしく○朝東方あかく満天へうつりあかれハ三日の内雨ふるすべて朝やけを雨として嫌ふ

夕霞　西赤く南へ廻れバ日和よし秋の氣なれバ北へまはるとよしとす久しく旱の後山谷とかくおとすハ翌日雨ふる

占候　此月暑氣薄けれバ五穀よろしからず蝿なけれバ新舊の米價貴し○白雲北斗の下に横たふれバ雨と定る○月内西北風吹ハ稲に

ガラス使用

批ふり○今月西北風はくさて吹ハ日和よし夕立もせず又この風ふきこハ冬こ河凍りて舟の通ひ不自由也○二十七日二十八日辰の刻風と主る○東風久しく吹と好す東風のごとく吹て夜露をおろさず稲生長にあしし

衣服式

帷子を着る　袴ハ浅黄

小紋縮上下ハ暑義縐子肩衣ハ嚴暑を凌くためれて後製のものゝ式礼の時ハ用ゆべからず

時衣

女郎花衣（おもて青　うら黄）

青瞿麦衣（おもて薄すはう　うら青）

女衣服

朔日より帷子をきるゝ上﨟ハ縮らみ或ハさらしときいろのひとへものをめさるゝ嘉祥ハ此月乃祝儀ハ地よりこんのあわせをめすべし

生花之式正

百合　蓮

養生

此月ハ腎衰へ精化して水となるゆゑよく慎しミて腎氣をかこふべし○冷水にて手を洗ふことなかれ五臓をかましむ沐浴又ハ冷水にて足を洗ふべからず風にあたりて眠ることなかれ生冷の物を食ふべからず食すべて是をゆるせバ秋に至りて瘧痢を發すなりと云説病の此月に多きハ陽を受て發するゆゑなりされバ強て驚くに非と

妙薬方

夏暑にあてられたると中暑とハ香薷散を用ゆべし○香薷大　厚朴　白扁豆　茯苓中

○老人虚人ハ清暑益氣湯よし

人參。白朮。麥門冬。五味子。橘皮甘草。黄栢。黄芪。當歸

○霍乱にハ藿香正氣散よし

○時氣にあたり又ハ食傷にハ○枇杷葉湯よし　○藿香中　莪朮中　呉茱萸小　ひとやう大　肉桂中　甘草小

ガラス使用

冬日凍瘡を發せざる妙術 當月もぐさにて暑き日大蒜を浸さたゞらして手足へ塗ときハ冬に瘃あかゞりと發せざる事妙なり

黶抜の妙術 今月藜を取り黒焼にして石灰と砥石と右三品と合せ壺に入て水を入茶を入茶のごろけしたる時わざとう血を出ざしはやく紙にてふくことよし

鰻松明の法 蒲穂を干油を塗り又かくして油をぬりて又干すおよにする事三四度して其上を鰻の皮にて巻き又油をぬりかくして火をともせバ雨中にも消る事されば

六月飲食并料理献立

好物 温饂のりのあるひハわろきものとろゝふな宜し

禁物 生冷を食ひのまざるといふ○韮○野鴨○雁○あひると食へバ水瘡生ぜ

△**飱飯** 水つけめしえ△水飯ともいふ△澆飯○飯を水にて洗ひ食ふ

㊕名飯よかなは魚のあづきなば其魚

△**瀧鱠** ときますへせでぶます

△**糒** △乾飯△引飯○冷水にひたして食ふ河内道明寺に作る物甚よし

△**冷索麺** △冷麪○ゆでゝ冷水にひやしたるもの

㊟ひは此麪と素白く見ゆせん素麪の皿より湊く湯の事る糸 梅子

△**瓊脂菜** 石花菜（同）△心太（同）㊕まろ系の事翔つて出せ心太 浪華

㊟系の素ならところてんやの物に價ぜんきの素わかしる 遠舟

料理

汁
やきあゆ
大こん
みやうがのこ

ひだうの
たゝき
さゝがきごぼう

うしほ
皮ふぐ
一口茄子

やきとうふ
まつたけ
絹ぶか

塩辛
あずび

ともぐき
さゝげ
ごぼう

清汁
すまし
ぎん
ごぼう
ぜん

ひらう
ふきさ
干大こん

こまうのこ
ともぐこ
青こんぶ
塩煮

鱠
あち
大こん
くらげ

こです
みやうが
せうが

こまずで
あうどい
大こう
きくらげ
みやうが

とこずこ
ゑび
あを豆
ゆ
こぞれ

とくてず
もぎき
竹の子
そうめ
菜せうが
なめ

ゑい
こゝうり
たで
せうろ
大こん

差味
あかひすゞき
みやうが
青のり

まめまぐろ
きうり
しそです

煮物
のつぺい
あわび
まつたけ
ごぼう
さんこ
松茸

てんぷら
大こん
せんぶ

ふもだこ
さゝげ
さけの皮
うど
ごぼう

あわびすえ
まいのり
くこ

かうさずえ
つぶし玉子
つけまくれ

吸物
せいご
みやうが

やきふまき
しそ

ゑび
みやうがのこ

精進

汁
里いも
糸菜

まゐまぎ
すり豆
しそ

書まぜ

せんべいふ
あげふ
ほそく切
大こんせんさく

ちとひさ
うまんのふの
油そあげ

菜つまみ
白玉ふ
うど

清汁
すまし
おまんさい
けんちん

さんせうのこ
まさすび
うす切
まつたけ

膾
ごま
大こん
きくらげ
あげふ
せうが

ゑるこ
すいき
白瓜
塩もし
せうが

こさくらげ
あげふ
せうが

こぞうこあへ
あげふ
きくらげ
まちよ
おそ豆
くり
せうが

差味
さゝこへ
菖
みやうが
いとうり
いし菜

かも瓜
竹子
さぞめ

せんまいもやし
下若かくへ
いいろけ
さく
小口やうり
ひしようて

煮物
うすのつぺい
しいたけ
こんにやく
まつたけ
いんげんまめ

里いも
大椎茸
むかご
ごぼう
ひめ干

つけぜんまい
青まめ
くわい
湯葉せん

和會物
みへへその

竹の子
ふき
辛あへ

上ケあすび
くろまめ
白あへ

きんしうり
みやうがたて
やや

吸物
おめんさい
しそ

いもまこき
すいこそ

六月食物用意の品

△醤油造△納豆仕込△ひしほ造△奈良漬製を

右の品々はそのつくりやう委しく日本歳時記といへる書に出たり

△水の粉△葛粉水△砂糖水△振舞水○冷麦も夏の頃へ

△麻地酒○暑中ニ呑酒なり美濃。豊後又ハ南都よりも出る浅茅酒といふ

(俳)跳てみ[illegible]棒手のさびは　安成

干瓜の法

瓜を二ツに割り中子を去り八九分ほど塩を入一夜おしをかけそれ明日取り出し上へ下をかへし日に干すべし

干茄子法

われ茄子をよりて皮を去り二ツ三ツに割りて干ぬ用るとき水にもどして煮るぞ宜し

豇豆塩漬乃法

米糀一升に塩四升合せわれささげをさやながら漬ければ久しく損せず茄子も甜瓜を又此如くするもよし

久敷貯ふ法

打綿と箱やうつの物に入其中へ瓜をつゝみ蓋を能していろ紙にてめをはれば百日ハ持なり

瓜茄子の類年中貯法

尤土用の瓜よし

寒の中の潮を甕に入たくハへ夏の瓜茄子の類を漬ければ色かはらずして久しく持つ潮ハ渚より五六丁も沖の潮よし汀ハあぢはひうすくして悪し

甜瓜年中貯ふ極秘傳

随分大瓜の蔕より頭のはうへあたる程に着まて穴をあけ其口へ明礬を二匁程入て木灰に糀半合まぜまて都合一升なれば塩二升入るはかりにて漬置き桶のてもつぎまでも口をとくり風の入ぬざるやうにすべし今月漬置きて九月より末勝手に出してつかふべし味ひいさゝかも變ずる事なし

酸漿子を貯法 色好赤くなるを採とりんて土用の井の水に漬おくれ秋に至て又水を替べしかくのごとくすれば外の売物の如く遠通りでもうづきゆかずも皺よらずしてよし

夏月氷を寒中の如く貯る法 銅の器に厭まで淑りたる湯をそこ入て口を能はめ水の入らぬやうにして井の底へおろしを付て沈め半日々一日程置て取上れば寒中の氷のやうにしかゝらず夏の内煮凍と拵るに葛粉など用ずに及ばず至極よく出來るなり

又法 つねに水を入て堅く口をとして釜に湯を淑らし其内へ入てさまし湯玉のなくなる時取上て井戸の中へ入おけば忽ち氷となるなり

青瓜越瓜年中貯法 瓜を四ッ割にして塩をぬまぶし一日置てのち新酒乃樽に詰め張こめ置ば年中変らざる時分の生の如くめづらしきものぞ

茄子瓜

大角豆青漬法 五升塩

二升右二品ともを合せ瓜大角豆なども漬そくべし　いつまでも色青々として生なるごとし　但風のつかぬやうになすべし

白瓜翌年まで青く貯置法

赤土一升　塩六升五合　右赤土をさらさら砕きてふるひて塩と一所に合せをき白瓜二つ三つわりて中ごみを能さらへ右の土にてつめ置べし　来年まで色かはることなし

夏煮に凍ざる法

鯉なる其外海魚なども精進物にてもなまにても又は醤油などにても煮る中へ石花菜と四角に切りて五つ六つ入てよく煮て鉢へあけ水に浸し置て用ゆべし

魚肉久敷貯法

（魚肉）の中へ胡麻の油を少し入置ば久しく日を経ても臭かはらず

煮熟したる物臭かはらざる法

煮熟したるものは何にによらず明日まで貯へ置たき時は大なる甕の口ひろきものに藁の灰の乾きたるを底にしき其煮たるものを碗になりとも入れ右の灰の上に置甕の口をたちたる布蒲團にておほひその上に平瓦をおもしにして風とほさず気のもれぬやうにすれば土用の日盛りにても一夜越て臭からず翌明日取出し先鍋を焚熱くして其のまゝ移して煮調べし若まがくばても取出して油断なれば味変ることなく

唐納豆の法

京もと大浄福

特1
2961

寺納豆といふハ土用前に麦一斗大豆一斗麦をバ蒸(む)し大豆ハ熬(いり)二品を能(よく)まぜ合せ土用の内に糀(かうじ)に裕させて四五月晴天に乾(かわ)かし臼にて挽いくさびも挽(ひき)へし簁(ふるひ)ぶるひにかけぬかをさそて土用中に水八升に塩二升煮(に)えして能(よく)さまし此水にて右の粉をまぜ少しづゝ入てまはするなり右はかふ口傳あり少しづゝ入てむらしくよく〳〵合せにぎりくるふむらしくもれり加減にてよしやらかなくは悪し是を縄に入ませてはこ桶に入て七日置て又つく又七日めくふつれ以上七度つくる八九月の頃になれるその時取り出して日にほし黒く色付ほどに干(ほ)しあげてよしかき木の葉を上下にそれ右の納豆をだんご程にちいさくしてうへくのべをひて上よりおしとかけるなり

ガラス使用